

## 2 外部資金による研究

### [概要]

外部資金の導入による研究の活発化については、歴博が追求している課題の一つである。代表的な競争的研究資金である日本学術振興会による科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）については、2021年度の新規採択件数は8件で、継続を含めた採択件数では27件、総額93,340千円であった（採択課題一覧参照）。

共同研究担当 松木 武彦・松田 陸彦・樋浦 郷子

### [採択課題一覧]

	研究種目	代表者氏名	研究課題名
新 規	基盤研究（B） 一般	日高 薫	幕末外交と贈答美術品-遣米・遣欧使節団の贈品を中心に
	基盤研究（B） 一般	山田 慎也	超高齢化社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために
	基盤研究（C） 一般	島津 美子	19世紀の日本における絵具素材の移り変わり
	基盤研究（C） 一般	石井 匠	3D計測による縄文・弥生・古墳時代の土器装飾を貫流する「文様破調」の実態解明
	基盤研究（C） 一般	吉井 文美	日中戦争・太平洋戦争期華南における中国占領地支配の進展と国際環境の変容
	基盤研究（C） 一般	川邊 咲子	地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存についての実践的研究
	挑戦的研究（萌芽）	内田 順子	沖縄/日本/アメリカ，女/男の分断を超えた視点の構築-作曲家・金井喜久子を中心に
	学術変革領域	箱崎 真隆	遺跡出土木材木材の単年輪データに基づく暦年較正の高度化と炭素14年輪年代法の確立
継 続	新学術領域研究 （研究領域提案型）	藤尾慎一郎	考古学データによるヤボネシア人の歴史の解明
	新学術領域研究 （研究領域提案型）	松木 武彦	集団の複合化と戦争
	基盤研究（A） 一般	村木 二郎	琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家
	基盤研究（A） 一般	坂本 稔	単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明
	基盤研究（A） 一般	箱崎 真隆	過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究
	基盤研究（B） 一般	川村 清志	文化の主體的継承のための民俗誌の構築-マルチメディアの活用と協働作業を通じて
	基盤研究（B） 一般	三上 喜孝	古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開
	基盤研究（B） 一般	田中 大喜	西遷・北遷東国武士の社会的権力化
	基盤研究（B） 一般	横山百合子	「隠し売女」から「淫売女」へ-近世近代移行期における売春観の変容
	基盤研究（B） 一般	小倉 慈司	格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築
	基盤研究（C） 一般	松尾 恒一	日本仏教と東南アジア仏教との比較研究-政治と権力の視点を中心として
基盤研究（C） 一般	樋口 雄彦	幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究	

継続	基盤研究 (C) 一般	樋浦 郷子	帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に
	基盤研究 (C) 一般	仁藤 敦史	古代荘園と在地社会についての高度情報化研究
	基盤研究 (C) 一般	福岡万里子	日本開国史の再構築-「開国のかたち」をめぐる国際的相剋の解明
	若手研究	天野 真志	幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成
	若手研究	橋本 雄太	データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築
	特別研究員奨励費	間芝 志保	近代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティー東アジアとの差異化の視点から―
	基盤研究 (C) 一般	三野 行徳	近代移行期、蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究

## 【科学研究費研究（新規）】

### (1) 基盤研究 (B)

幕末外交と贈答美術品―遣米・遣欧使節団の贈品を中心に  
2021～2024年度  
(研究代表者 日高 薫)

1. 目的
2. 今年度の研究計画
3. 今年度の研究経過及び成果
4. 研究組織 (◎は研究代表者)

### (2) 基盤研究 (B)

超高齢化社会を見据えた葬墓制システムの再構築：多様な生前と死後をつなぐために  
2021～2024年度  
(研究代表者 山田 慎也)

#### 1. 目的

超高齢多死社会へ突入した現代日本において、高齢者（とくに家族のサポートが期待できない）がどのように死を迎え（葬儀を含め）死後の対処がなされているのか、行政や民間組織など第三者機関の役割に留意しつつ、アンケートやインタビューそして現地調査を行い、生前から死後への一貫した視点で、その実態を考察することを目的とする。この現在進行形の課題をより深く把握するために、過去・将来それぞれと向き合う課題にも取り組む。過去への課題は、個人化の進む現状へと至った要因を探り、無縁供養など将来への知見となりうる過去の多様性を把握するため、約200年程度の歴史的経緯を検討する。また将来への課題として、今後の状況へ対応するための葬墓制研究情報のプラットフォーム構築を目指し、学際的な葬墓制研究情報の整備に着手する。以上、現在・過去・将来それぞれに向き合う課題への取り組みを通して、人類史上経験のない超高齢多死社会をなつた日本が、安心して死を迎え/亡くなる人を送るための葬墓制システムの構築と文化の形成に寄与することを目指す。

#### 2. 今年度の研究計画

全体会では、プロジェクトを開始するため、全体方針の確認と研究費の見直しによる実施内容の検討、具体的計画の確定および情報共有などを基盤とした研究会を行う。

いわゆる無縁死者に関する全国アンケートの実施準備を行う。これは全国1741の市区町村を対象とする。ただし、

それぞれの市区町村によって対応部署がことなるため、それぞれ情報収集を行う。さらに納骨のあり方、慰霊祭の有無、日常の祭祀など、調査項目の検討を行う。生前対応機関による死後への対処の実態調査、および死後対応機関による生前からの対処の実態調査について、調査への依頼のための準備と調査項目の整理を行う。

死者祭祀の歴史の変遷と無縁供養の多様性調査では、家（家族）が死者祭祀を担う葬墓制システムの成立・展開と、そこからはずれた無縁死者供養の多様性を解明する。そのために調査対象の選択と民俗学・考古学・宗教学などの専門性に即して分担を行う。葬墓制研究情報のプラットフォーム構築では、学際的な葬墓制研究情報の整備に着手するため、その素材として葬具関連の特許・実用新案データベースの作成に取り組む。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

プロジェクト開始に当たり、各メンバーの課題の共有を集中的に行った。ここではそれぞれの課題の留意点についても、メンバー相互から指摘することでより明確化することができた。無縁死者に関しては行政ごとに担当カ所やその対応方式、生活保護法の適用の有無など、かなり多様な形態があり、単なるアンケート項目では実態に迫れないことは判明したので、次年度も含め検討を行うこととなった。

また、墓祭祀や仏壇祭祀などの歴史的経緯を含め、地域の多様性も加味した形で検討することは必要で有ることを認識した。特に仏壇祭祀については本研究の課題とも密着に関連しており、継続的に検討することとなった。さらに、近代から現代に掛けての死者祭祀における産業の影響も大きく、特許情報による産業の影響を指摘することができ、引き続き特許情報の検索をすることとなった。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎山田 慎也	本館研究部・教授
土居 浩	ものづくり大学工芸技能学部・教授
朽木 量	千葉商科大学政策情報学部・教授
田中 大介	自治医科大学医学部・教授
谷川 章雄	早稲田大学人間科学学術院・教授
玉川 貴子	名古屋学院大学現代社会学部・准教授
間芝 志保	東北大学大学院文学研究科・准教授
瓜生 大輔	東京大学・先端科学技術研究センター・特任講師
金 セツピョル	総合地球環境学研究所・研究基盤国際センター・特任助教
森 謙二	茨城キリスト教大学・名誉教授
鈴木 岩弓	東北大学・総長特命教授
小谷みどり	身延山大学・客員教授

## (3) 基盤研究 (C)

### 19世紀の日本における絵具素材の移り変わり

2021～2023年度

(研究代表者 島津 美子)

#### 1. 目的

本研究では、絵画、錦絵、写真といったさまざまなジャンルの彩色資料を対象に、とくに19世紀の絵具はどのような素材で作られ、流通していたのかを明らかにすることを目指す。

日本絵画などの絵具分析は1950年代から行われているが、絵画以外の彩色資料の分析、とりわけ染料から作られた顔料分析まで行っている事例は限られている。他方で、江戸時代中期（18世紀後半）に誕生した多色摺木版画では、主に染料を粉末に加工したものを絵具に用いていた。こうした有機質の顔料の素材や製造法については明らかにされていないことも多いことから、当該時期に製作された彩色資料を対象に、資料の属性を問わず横断的な絵具の材質分析を行うことで、江戸時代から明治期にかけての絵具の素材とその加工方法、流通について明らかにすることを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

研究初年度は、国内での資料調査および文献調査を中心に実施する。資料調査は、神田佐野文庫（神田外語大学）が所蔵する「JAPAN: Described and Illustrated by the Japanese, Edition De Luxe」全十巻（フランス・ブリ

ンクリー編著) (1897年発行) に含まれる写真資料群などを対象とし、印刷インキや手彩色写真についての調査、分析を予定している。「JAPAN」に含まれる写真は、コロタイプ印刷のものが各巻1点の10点、鶏卵紙写真に手彩色されたものが複数点掲載されている。海外向けに輸出品として国内で製作されており、書籍の刊行に合わせて製作されたため写真群の製作年も書籍の発行年とほぼ同時期とみなせる資料である。加えて、館蔵資料についても同時期に製作された類似資料がないかを改めて見直す予定である。

これらの印刷インキや手彩色写真に用いられた絵具の材質分析を行うことで、明治期の彩色材料の一端を明らかにすることを旨とする。あわせて、これまで調査してきた明治期の化学工業に関わる書籍を中心に、国内での印刷インキ、絵具製造に関する記述を整理し、材質分析の結果と照らし合わせることで、使われたインキや絵具の製造方法あるいは導入の経緯を探る。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

研究初年度は、神田佐野文庫(神田外語大学)が所蔵する「JAPAN: Described and Illustrated by the Japanese, Edition De Luxe」全十巻(フランシス・プリンクリー編著)(1897年発行)から、第1巻および第8巻にみられる彩色材料を分析した。また、同大学が所蔵する写真集「Illustrations of Japanese Life」(高島捨太著、小川一眞写真)(初版1896年)の調査も行った。文献調査としては、1880年代に発行されたインキ製法などを記した技術書の調査を行った。

明治期のカラー写真は手彩色で行われていたことが知られているが、その際用いられた絵具についての分析事例はいまだ限られている。本調査では、デジタル顕微鏡による表面状態の観察、ポータブル蛍光X線分析計による元素分析を行い、可視分光反射率の計測を試みた。絵具の状態から当初予想したように、染料から作られた絵具が使われていた可能性が示された。他方で、「JAPAN」に含まれる巻末の木版画や、「Illustrations of Japanese Life」の彩色された表紙には、赤絵具として古くから使われている水銀朱、緑絵具には幕末明治期に輸入され始めたと考えられている合成顔料エメラルドグリーンが使われたと推定された。赤や緑は手彩色写真にも見られる色相であるが、同じ書籍内であってもこれらの顔料は用いられておらず、写真彩色では木版画や肉筆画とは異なる材料が使われていることが示唆された。

初年度は実資料の調査件数が限られてしまったが、次年度以降、調査数を増やすことで明治期の彩色写真に用いられた絵具の全体像を明らかにすることを旨とするとともに、その他の彩色資料調査を行い、19世紀の絵具素材を概観できるようにする。

### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎島津 美子 本館研究部・准教授

## (4) 基盤研究 (C)

### 3D計測による縄文・弥生・古墳時代の土器装飾を貫流する「文様破調」の実態解明

2021～2023年度

(研究代表者 石井 匠)

#### 1. 目的

近年の縄文土器や弥生土器をフォーカスする博物館・美術館の展覧会は、両者の違いを際立たせる対置展示と各時代固有の美を称揚する展示に分かれる。どちらも、展覧会企画者の考古学者達の念頭には各時代間の美の断絶が想定されており、その背後には「狩猟採集民社会→農耕民社会→王権社会」という発展段階説に裏打ちされた「過去<現在」という価値尺度のバイアスと、これと相即不離の「未開<文明」「周縁<中央」という根強い差別意識が見え隠れする。問題は、本来、各時代の美を構成する要素の共通性と差異を解明する美術考古学的な問いに立脚するはずの議論が、政治的な価値比重の議論にすり替えられ、違いばかりが注視されることにある。

本研究では、各時代の土器面全域の装飾文様に焦点を当て、これまで看過されてきた縄文・弥生・古墳時代の美に貫流する共通の要素と目される「文様破調」(土器面を帯状に周回する連続文様の反復リズムを意図的に一か所で崩すもの)に注目し、3Dモデルを用いて土器面全域の文様構造を多視点から分析することで、その実態を明らかにし、あらたな先史美術史像の構築を試みることを目的としている。

#### 2. 今年度の研究計画

初年度は、縄文時代から弥生時代の移行期、弥生時代から古墳時代の移行期の土器を対象に、文様破調の具体事例を集積すべく、事前選定地域の資料を対象に、日本列島の各地域に調査へ赴き、3Dデータの集積に集中する予定であった。しかし、新型コロナウイルス感染拡大に伴う活動制限等により、調査は予定通り実施できず限定的となった。そのため、遺跡発掘調査報告書等の獵歩に切り替え、調査は限定的となった。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

対象地域・時期以外にも視野を広げて進めることで2D事例を一定数積み上げ、新事例は各地の一般向け招聘講演にて紹介し、文様破調を考察する際の基盤となる理論モデルを論文化した。また、今後集積していく3Dデータの公開先の模索も進め、大規模データベースでの公開の内諾を得ることができた。2年目は、初年度に実施できなかった3D写真計測調査の機会をうかがいつつ、初年度に集積した2Dデータの新事例を基に学会発表や論文投稿、招聘講演等で、順次、可能な成果の公開に努めていく。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎石井 匠 国立歴史民俗博物館・科研費支援研究員

【研究協力者】

深澤 太郎 國學院大學博物館・准教授

## (5) 基盤研究 (C)

日中戦争・太平洋戦争期華南における中国占領地支配の進展と国際環境の変容

2021～2024年度

(研究代表者 吉井 文美)

### 1. 目的

日中戦争期の日本の中国支配は、外国権益が多数存在する地域に対して、占領地支配を行う法的な背景が曖昧なまま進展していた。そして、その性質は太平洋戦争開戦時に中国および、外国権益の所有国（イギリスやアメリカなど）と日本が宣戦布告を行うことで変化した。本研究は、日中戦争期・太平洋戦争期の華南（中国南部）において、日本の中国支配の拡大とともに同地域の政治・経済・社会的ネットワークが変容したことで、同ネットワークと深い関係性のなかで存在していた外国権益がいかなる対応を迫られたのか、そしてそれによって日本をとりまく国際関係がいかに変化したのかについて、多言語史料に基づいて明らかにするものである。これにより、正規の軍政を施行できなかった日中戦争の占領地支配の特質と、太平洋戦争開戦がもたらしたインパクトについて華南の事例を明らかにする。

### 2. 今年度の研究計画

今年度は日中戦争期の珠江航行をめぐる日本とイギリスの間の交渉について考察する。珠江は華南地域の経済的な中心地である広州と、イギリス領・香港の間を航行する際に通過する河川であり、経済的・軍事的に極めて重要な意味を持つ。イギリスやアメリカなどの列強は、中国から同河を自由に航行する権利を獲得していた。しかし、1938年の日本軍による広東占領以降、日本は同河の一部を軍事封鎖したため、航行再開をめぐる交渉が主に日本とイギリスの間で展開された。この交渉の展開について実証的に明らかにする。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度の研究では、珠江が日本軍によって封鎖されてから、部分的に開放されるまでの間に展開された外交交渉について、日本外務省や海軍、イギリス外務省、アメリカ国務省の史料をもとに実証的に明らかにし、研究報告を行った。さらに、研究報告を通して得られたコメントをもとに、新たな資料の調査・分析も行い、研究成果を学術論文としてまとめるための準備を進めた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎吉井 文美 本館研究部・准教授

(6) 基盤研究 (C)  
 地域民具コレクションの整理手順のモデル化と緩やかな保存について  
 の実践的研究  
 2021～2023年度  
 (研究代表者 川邊 咲子)

1. 目的
2. 今年度の調査
3. 今年度の研究経過及び成果
4. 研究組織 (◎は研究代表者)

(7) 挑戦的研究 (萌芽)  
 沖縄/日本/アメリカ, 女/男の分断を超えた視点の構築—作曲家 金  
 井喜久子を中心に—  
 2021～2023年度  
 (研究代表者 内田 順子)

1. 目的

沖縄県宮古島出身の金井喜久子 (1906-1986) は、女性作曲家として日本で初めて本格的な交響曲を作曲した人物である。1930年代から1980年代までの約50年間、沖縄音楽をモチーフとして、西洋音楽の手法により多くのジャンルの作品を作曲したほか、琉球諸島の民謡やわらべ歌の研究など、幅広く活動した。これほどの事績を残した人物でありながら、先行研究は限定的で、正当に評価されていないのが現状である。本研究は、喜久子の活動に関する未整理・未発表の資料群を整理・可視化し、情報を分析することによって、喜久子の事績を実証的に明らかにする。さらに、その資料群に含まれる、美術・文学・批評・映画・社会運動等の第一線で活動した人々に関する情報を整理し、喜久子の人的ネットワークを分析する。以上により、沖縄近現代史や社会運動史、女性史、ジェンダー研究などのマクロな研究への接続を試みる。

2. 今年度の研究計画

2021年度は、喜久子が残した楽譜・写真・文書 (チラシ・プログラム) 等の資料整理を実施する。楽譜 (約60曲)・写真 (約300点)・(チラシ・プログラムなど約350点) 等の目録を作成し、デジタル化・テキストデータ化する。さらに、宮古島および那覇での喜久子の生育環境や、東京での音楽教育に関する情報を収集し、喜久子が置かれていた音楽環境を実証的に明らかにする。以上により、喜久子関連資料の全体像と、そこから明らかになる人的ネットワークの広がり、本資料群が有する学術的および社会的意義について考察する。

3. 今年度の研究経過及び成果

本研究が対象とする資料は、金井喜久子のご遺族の私邸に保管されており、ご遺族の立ち会いと協力のもとで調査を進める必要があり、緊急事態宣言およびまん延防止等重点措置期間は、COVID-19の感染防止の観点から、調査を実施することができなかった。そのため2021年度は、計画よりも調査が遅れ、喜久子が残した文書 (チラシ・プログラム) を中心に、2021年10月16日、10月23日、11月6日、11月13日、11月27日、12月11日、2022年1月8日の計7回、調査を実施し、文書約141点について簡易目録を作成した。これまでに調査できた文書資料には、喜久子が作曲家として活動を始めた初期の演奏会や、ブラジル渡航に関連して開催された音楽会などの中期の多様な音楽イベント、また、ひめゆり平和祈念資料館建設のためのチャリティー演奏会などの中期から後期にわたる社会運動と演奏会に関するチラシ・ポスター・プログラムが豊かに含まれおり、これまでは喜久子の自伝の記述に頼らざるを得なかった喜久子の音楽活動の事績を、具体的かつ実証的に明らかにできる見通しを持つことができた。また、これらの文書資料には、演奏会開催の経費に関わる資料のほか、喜久子の音楽歴が確認できる資料、演奏会招待者名簿なども残されており、これらの分析を進めることで、喜久子が置かれていた音楽環境や人的ネットワークについても有用な情報が得られる見込みであることが明らかになった。

## 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎内田 順子 本館研究部・教授

## (8) 学術変革領域 (A)

遺跡出土木材の単年輪データに基づく暦年較正の高度化と炭素14年代  
輪年代法の構築  
2021～2022年度  
(研究代表者 箱崎 真隆)

## 1. 目的

本研究の目的は、日本産資料の暦年較正の高度化を見据えて、①植物利用遺構から出土した木材をもとに紀元1-3世紀の炭素14データを隙間なく獲得する、②同じ暦年の年輪を複数回測定して統計誤差を縮小し日本特有のウィグルをとらえる、③年輪年代法の統計解析を応用し「炭素14年輪年代法」を確立するという3点である。本研究では同じ暦年の年輪試料を繰り返し測定することで、通常±30から±20年の炭素14年代誤差を±10年ほどまで狭め、日本特有のウィグルを精密にとらえる。こうすることで、質の高い炭素14標準年輪曲線を構築し、年輪年代学的解析による誤差0年で年代決定を実現する。本研究が成功すれば、あらゆる時代において質の高い単年輪データを整備する機運が生まれ、炭素14年輪年代法が日本のみならず世界的に発展していくことが期待される。

## 2. 今年度の研究計画

本年度は、紀元1-3世紀の年輪をもつ佐渡島の低湿地遺跡から検出された植物利用遺構の出土木材を分析して、単年輪炭素14データを獲得する。この試料は酸素同位体比年輪年代法によって全ての年輪の暦年代が確定している。この試料において同じ暦年の年輪を繰り返し測定して誤差を縮小し、細かなウィグルを復元する。炭素14は極微量であるため、1度の測定では大きな誤差が伴う。同じ暦年の年輪には、理論上、同じ量の炭素14が含まれるので、繰り返し測定し、データを平均することで誤差を小さくできる。紀元1-3世紀の単年輪を3度繰り返し測定し、そのデータを元に通常の測定では把握できない細かな炭素14挙動(ウィグル)を復元する。このようにしてクオリティを高めたデータを次期IntCalの基盤データにするほか、炭素14の時系列変動に基づく年輪年代測定の標準年輪曲線とする。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

研究協力者である福島大学木村勝彦教授から佐渡島出土スギ材を受領し、化学処理によって2mm厚のセルロース板を抽出した。西暦73年-202年にわたる年輪があることを年輪年代学的解析によって確認し、1年輪単位でセルロースを切り分け、暦年ごとの重量を計量した。西暦183年-202年にわたる20年輪において、2.5mgずつセルロースを瓶詰めし、東京大学総合研究博物館放射性炭素年代測定室に送付して、AMSによる炭素14測定を有償依頼した。測定は1暦年あたり3回実施し、質の高いデータを得ることができた。次年度は、引き続き、残りの年代範囲のデータを得る予定である。

## 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員

## 【科学研究費研究 (継続)】

## (9) 新学術領域研究 (領域提案型)

考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明  
2018～2022年度  
(研究代表者 藤尾 慎一郎)

## 1. 目的

AMS—炭素14年代測定によって相対年代から数値年代への転換が進む高精度な較正暦年代に基づいた弥生時代研究と、DNA解析が急速に進んでいる分子人類学との異分野研究によって、数値年代にもとづくDNAのあり方

が復元できる。その成果は、弥生～古墳時代の親族構造や通婚圏、人口増加率などを得るために有益な情報となる。

特に九州北部に分布する弥生時代の甕棺出土人骨から採取したDNAと、同人骨の炭素14年代測定によって得られた死亡年代を比較して、数十年単位の高精度な時間軸に基づいたDNAを導きだし、墓に葬られた人びとの親族構造を解明する。

また、現代日本人のゲノムに12%程度みられる縄文由来のDNAの意味を考えると、古墳時代以降も列島外からのDNAが加わる必要性が想定されているため、日本列島へ人類が渡ってくる経路地である朝鮮半島南部から出土する三国時代を中心とした古人骨のDNAと年代・同位体比分析を行って、古墳時代人骨と比較する。

## 2. 今年度の研究計画

今年度は、2021年7月17～18日に岡山大学において新学術領域研究B01班第7回考古班会議、2022年1月22～23日に国立歴史民俗博物館において第8回考古班会議（オンライン）を開催した。コロナ禍とあって昨年同様、新たな調査を行うことができなかったが、2019年度に調査を行った熊本大学医学部に所蔵してある人骨の内、弥生・古墳時代人骨の年代学的調査報告と、縄文・弥生・古墳人骨のDNA分析結果を、国立歴史民俗博物館研究報告に投稿した。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

2021年度もコロナ禍にあったため、新たな調査・サンプリングの機会はなかったが、昨年度までに分析していた調査成果をA02班と共同で、論文2と研究ノート2、調査報告という形で『国立歴史民俗博物館研究報告』に投稿し、2019年度の調査(2)を2021年10月19日に第229集として刊行した。また現在、2020年度の調査(1)の査読が終了し、現在、修正中なので、2022年10月までに特集号の刊行を目指している。また、日本考古学協会第87回総会において、セッションを組み「古代DNA解析と考古学の接点」として、5月23日に学会発表を行った。

### 【論文】

木下尚子「貝殻集積からみた先史時代の貝交易(2)」国立歴史民俗博物館研究報告第229集, pp.15-44.

宮城弘樹「貝殻集積の炭素14年代測定から見た貝塚時代後期土器編年―貝塚時代後期土器の研究(Ⅶ)」国立歴史民俗博物館研究報告第229集, pp.45-85.

### 【研究ノート・調査報告】

山田康弘・木下尚子・瀧上舞・坂本稔・藤尾慎一郎・篠田謙一「熊本大学医学部所蔵縄文時代の人骨の年代学的調査」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集, pp.121-147, 2022年3月31日

藤尾慎一郎編『考古学データによるヤポネシア人の歴史の解明―2019年度の調査(2)』国立歴史民俗博物館研究報告第229集, p.227頁, 国立歴史民俗博物館, 2021年10月19日

### 【所収調査報告】

濱田竜彦「青谷上寺地遺跡SD38出土弥生時代後期人骨群の年代に関する検討―人骨群の形成時期と期間について―」, pp.87-111.

清家章・篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登「古墳時代前期首長墳被葬者の親族関係―高松茶白山古墳を中心に―」, pp.113-128.

濱田竜彦・瀧上舞・坂本稔「鳥取県内所在古墳群出土人骨の年代学的調査(1)―越敷山古墳群・日下古墳群・向原古墳群―」, pp.127-143.

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登・清家章「岡山県内古墳出土人骨のミトコンドリアDNA分析」, pp.145-152.

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県西之表市田之脇遺跡出土人骨の年代学的調査」, pp.153-159.

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県鹿屋市に所在する地下式横穴墓から出土した人骨の年代学的調査―立小野堀遺跡・町田堀遺跡―」, pp.161-167.

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県西之表市小浜遺跡出土人骨の年代学的調査」, pp.169-173.

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登・竹中正巳「鹿児島県西之表市小浜遺跡出土中世人骨のミトコンドリアDNA分析」, pp.175-181.

竹中正巳・坂本稔・瀧上舞「鹿児島県南九州市高取遺跡出土人骨の年代学的調査」, pp.183-187.

木下尚子・坂本稔・瀧上舞「沖縄貝塚時代貝殻集積等出土貝殻の年代学的調査―具志堅貝塚・アンチの上貝塚・熱田第二貝塚, 浜屋原貝塚B地点, 大久保原移籍, 木綿原遺跡, 伊礼原遺跡, 宇地泊兼久原第一貝塚, 嘉門貝塚B, 大原貝塚, 古座間味貝塚, 阿波連浦貝塚―」, pp.189-246.

木下尚子・坂本稔・瀧上舞「沖縄貝塚時代人骨等の年代学的調査—具志川島遺跡群，具志原貝塚，具志堅貝塚，大当原貝塚，具志川グスク崖下遺跡—」，pp.247-277.

清家章・瀧上舞・坂本稔「韓国慶北永川完山洞古墳群出土三国時代人骨の年代学的調査」『永川—新慶州複線鉄鉄1工区内永川完山洞山28-5番地遺跡』pp.429-431，(財)韓国ウリ文化財研究院，2022年1月31日

篠田謙一・神澤秀明・角田恒雄・安達登・清家章・藤尾慎一郎「韓国慶北永川完山洞古墳群出土三国時代人骨のDNA分析」『永川—新慶州複線鉄鉄1工区内永川完山洞山28-5番地遺跡』pp.439-443，(財)韓国ウリ文化財研究院，2022年1月31日

#### 【学会発表】

第87回日本考古学協会総会 セッション3「古代DNA解析と考古学の接点」(日本人類学会骨考古学分会との共催) 専修大学生田キャンパス 2021年5月23日 要旨集pp.55-60.

篠田謙一 趣旨説明

篠田謙一 「弥生・古墳・貝塚時代のDNA分析が目指すもの—現代までの到達点—」

藤尾慎一郎 「韓国新石器時代・三国時代のDNA分析からわかったこと—慶尚道出土人骨を中心に—」

神澤秀明 「弥生時代早期の西北九州型弥生人の核DNA分析について—佐賀県大友遺跡8号支石墓出土人骨を中心に—」(オンデマンド配信)

濱田竜彦 「DNA分析でわかった弥生時代後期の鳥取県青谷上寺地遺跡の特徴」(オンデマンド配信)

清家章 「古墳時代前半期首長墳被葬者の親族関係—高松茶白山古墳を中心に—」(オンデマンド配信)

#### 【研究会】

2021年7月18-19日 第7回考古班会議 岡山大学&オンライン

2022年1月22日 第8回考古班会議 オンライン

#### 【一般向け活動】

とっとり弥生の王国プレミアムシンポジウム『続・倭人の真実—青谷上寺地遺跡に暮らした人々—』2021年10月30日，とりぎん文化会館ホール

講演1 藤尾慎一郎「弥生時代研究の変革—ヤポネシアゲノムと考古学—」

講演2 篠田謙一「青谷上寺地遺跡出土人骨から何が見えてきたのか」

講演3 濱田竜彦「青谷上寺地遺跡出土人骨の時代背景」

パネルディスカッション「倭人の真実」

## 4. 研究組織

### 【研究代表者】

藤尾慎一郎 本館研究部・教授 研究総括，弥生時代人骨の考古学的解析

### 【研究分担者】

木下 尚子 熊本大学・名誉教授 奄美・沖縄出土人骨の考古学的解析

清家 章 岡山大学・教授 古墳時代人骨の考古学的解析

山田 康弘 東京都立大学・教授 縄文時代人骨の考古学的解析

濱田 竜彦 鳥取県地域づくり推進部文化財局鳥取弥生の王国推進課青谷上寺地遺跡整備室係長  
中国地方の先史時代人骨

### 【研究協力者】

坂本 稔 本館研究部・教授 炭素14年代測定

瀧上 舞 本館研究部・プロジェクト研究員 食性分析・年代測定(12月より国立科学博物館人類研究部研究員)

## (10) 新学術領域研究領域提案 集団の複合化と戦争 2019~2023年度 (研究代表者 松木 武彦)

### 1. 目的

本研究の目的は，ヒト固有の「入れ子状に階層化する多数の集団が複合した巨大な社会」が生み出されたメカニズムとプロセスを，戦争という事象を通じて解明することである。戦争には，武力による征服によって集団間の統合を促す外的・物理的側面だけではなく，戦争という状況の演出によって集団内のアイデンティティを強化し，そ

の操作を通じて強化された権力によって急速な階層化が進むという内的・認知的側面とがある。本研究はとくに後者に力点を置き、戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化とその地域比較によって、ヒト社会における戦争と社会複合化のプロセスを復元する。さらに、ヒトの認知と身体がどのようにして戦争という現象を生み、それを媒介に、どのような認知と進化のメカニズムが、集団の複合化と、それによるヒト特有の巨大社会を実現したのかを明らかにする。

## 2. 今年度の研究計画

上記のうち、2021年度の目的は、第1に、前年度に引き続いて「戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化」を完成させ、地域比較の基盤を得ることである。具体的には、「戦争に関わる人工物（考古資料）」の体系化（エビデンス表の作成）について、COVID-19の感染拡大に伴って2020年度にはほとんど実施できなかった資料整備（海外における遺跡の発掘調査と国内外における文献データの収集）を最終的に完了し、それに基づいて、班員がそれぞれ分担する地域を対象に「戦争に関わる人工物（考古資料）の時系列化」を提示することである（「班全体の研究概要 ②班員の研究活動」として後述）。第2に、それらを地域間で相互比較しつつ、「社会の複合化と戦争」のプロセスとメカニズムを普遍的に解明することである。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

### ①研究会・シンポジウム

2021年度は、前年度に引き続いてA03班「集団の複合化と戦争」に関連する公募研究として、「偏狭な利他主義仮説の実証的検討」（研究代表者：北海道大学文学研究科教授 高橋伸幸）、「マヤ文明黎明期の複合社会の形成と戦争に関する研究」（研究代表者：茨城大学人文社会科学部教授 青山和夫）、「古代マヤ王族の日常の実践から解明する戦争と階層化の関係性」（研究代表者：京都外国語大学研究員 塚本 憲一郎）が加わり、計画研究のメンバーと場を共有しつつ協力して作業を推進した。

これらの公募研究の研究代表者や関係者とA03班のメンバーを合同させた形で、本研究のオリジナル行事としては、2回の研究会と2回の国際シンポジウム（うち1回は予備会議）を実施した。その目的は、班員相互の研究に関わる視点や情報の共有を図ること、および「社会の複合化と戦争」のプロセスとメカニズムを普遍的に解明することにつながる視座や論点を明確化していくという前年度までの目的に加えて、国際的・学際的な研究を進めた。

第1回研究会は、8月22日にzoomによる遠隔会議として開催した。外部の研究プロジェクトとの協業として、「科学研究費基盤研究S「年輪酸素同位体比を用いた日本列島における先史暦年代体系の再構築と気候変動影響評価」（松木は連携研究者として参加）の研究代表者である中塚武氏（名古屋大学）を招いて「高時間分解能での気候復元研究の進展と前近代社会の気候応答についての考察」の報告を得、Discussantとして本研究から青山和夫氏（公募研究代表）による「気候変動とマヤ文明の盛衰」および寺前直人氏（研究分担者）による「武器（長柄武器）の画期と弥生時代後・終末期の気候変動」の2本の報告を示した。第2回研究会は3月4日（金）に開催し、研究分担者・研究協力者ならびに公募研究代表者が、今年度のそれぞれの研究成果を開陳して議論を行った。

国際シンポジウムは、国立歴史民俗博物館との共催の形で、下記のように実施した。

#### ◎人間文化研究機構国立歴史民俗博物館 国際研究集会<シンポジウム>戦争のランドスケープと先史社会

（共催：国立歴史民俗博物館、岡山大学文明動態学研究所、新学術領域研究「出ユーラシアの統合的人類学—文明創出メカニズムの解明—」

〔日時〕 2021年11月20日（土） 9：00-16：30

〔場所〕 国立歴史民俗博物館 大講義室 + リモート開催（ハイブリッド）

〔内容〕

趣旨説明：戦争のランドスケープと先史社会：松木武彦（国立歴史民俗博物館 教授）

スペイン人侵入以前のアンデス社会における戦争と暴力—様々な資料の比較を通じて（英語：同時通訳）：

Elizabeth Arkush (Professor of Archaeological Department, University of Pittsburgh)

社会変化誘発要因としての戦争（英語：同時通訳）：Steven Le-Blanc (Former Duputy-director of Peabody Museum of Archaeology and Ethnology)

北アメリカ先史時代の戦争：佐々木 憲一（明治大学文学部 教授）

弥生・古墳時代における攻めと守りの変質とその画期：寺前直人（駒澤大学文学部 教授）

古墳の儀礼と戦争：松木武彦（国立歴史民俗博物館 教授）

3者討論「先史時代の戦争と社会」：佐々木憲一・寺前直人・松木武彦

### ②資料の収集と分析

COVID-19の感染拡大に伴うさまざまな規制により、2020年度に引き続いて、北アメリカ、中央アメリカ（メキシコ・グアテマラ・ホンジュラス）、オセアニア（トンガ・ミクロネシア・ツバル・クック諸島）におけるデータの取得が平均約30%（日本国内で取得できるデータ）に限られ、後述の「エヴィデンスデータ表」の完成と、それによる相互比較を実地で行うには至っていない。ただし、上述した研究会・シンポジウム等によって、相互比較のための視座や論点を明確化する作業が先行して進んだ。

「エヴィデンスデータ表」では、「戦争に関わる人工物（考古資料）」の体系化として2021年度に設定した62項目に、日本列島中央部および南部・北部、北アメリカ、中央アメリカ、南アメリカおよび南太平洋の各地域において、それぞれの担当者が有無や消長を調査して「エヴィデンス表」の作成を続行した。なお、この作成は、戦争に関する上記の62項目のみならず、A01・A02班がそれぞれ管轄するモニュメントおよびアートに関する諸項目も併せて、事実上は各担当者が作業地域を設定して進めた。その詳細は次のとおりである。

日本列島中央部：関東～近畿（寺前直人）、瀬戸内（松木武彦）、九州（橋本達也）、東北（藤澤敦）、奄美・沖縄・先島（山本正昭）

北アメリカ：北アメリカ大陸中東部のカホキア、マウンドヴィルなど（佐々木憲一）

中央アメリカ：マヤ、ベテン・チアパス・ユカタン諸地域および周縁地域（市川彰）

南アメリカ：インカ、ワリ、およびペルー北高地とペルー北海岸を結ぶヘケテペケ川流域（渡部森哉）

オセアニア：トンガ（比嘉夏子）、トンガ・ツバル・クック諸島（長岡拓也）

ただし実際には、各地域は、残されたデータの性質や密度も異なるので、上記の体系化項目にそのままインプットすると、地域ごとに粗密の差や通底的分析の不都合が生じる可能性がある。そのための対処として、日本列島の古代境界領域やインカでは文字記録（藤沢・渡部）、マヤについては碑文（市川）、トンガについては人類学的資料（比嘉、上記の体系化のうち「データ群Ⅳ（戦争に関わる非考古学的資料）」に相当）を補足的に扱い、全体として地域ごとの粗密のないデータの抽出と整理が行えるようにしている。

### ③研究成果（代表者のみ）

#### 【論文】

<査読あり>

松木武彦、日本列島先史・原史時代における戦いと戦争のプロセス、年報人類学研究12, pp.124-136, 2021年6月30日

松木武彦、特集「新しい戦争の考古学」によせて、年報人類学研究12, pp.121-123, 2021年6月30日

松木武彦、日本列島先史—原史段階の社会変化と「環境」—歴史変化の定量的把握とメカニズム解明に向けての試論一、国立歴史民俗博物館研究報告231, pp.211-244, 2022年2月

松木武彦・青山和夫、古墳文化とマヤ文明：比較考古学事始、文明動態学研究1, pp.21-38, 2022年3月

#### 【研究発表】

Matsugi,Takehiko, The Last 200 Years of the first millennium BCE as the “Axial Age” in prehistoric JAPAN”,

European Association of Archaeologists 27th Annual Meeting, Kiel (Remote), 2021年9月9日

松木武彦、戦争のランドスケープと先史社会、歴博国際シンポジウム「戦争のランドスケープと先史社会」、2021年11月30日

#### 【その他】

松木武彦、心で考える社会の複合化と戦争、NEWSLETTER 出ゆーらしあ vol.02, pp.11-12, 2022年3月15日

松木武彦、先史日本の争いの起源—「狭い共感」を昇華できるか—、稲村哲也・山極壽一・清水展・阿部健一編、レジリエンス人類史、京都大学学術出版会、pp.196-215, 2022年3月31日

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎松木 武彦 本館研究部・教授

市川 彰 名古屋大学高等研究院（文）・特任助教

佐々木憲一 明治大学文学部・教授

寺前 直人 駒澤大学文学部・教授

橋本 達也 鹿児島大学総合研究博物館・教授

比嘉 夏子 北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科・助教

藤澤 敦 東北大学学術資源研究公開センター・教授

渡部 森哉 南山大学人文学部・教授

#### 【研究協力者】

岡安 光彦 学識経験者  
 長岡 拓也 NPO法人パシフィカ・ルネサンス代表理事  
 山本 正昭 沖縄県立博物館・美術館  
 Elizabeth Arkush (University of Pittsburgh)  
 Hugo Cesar Ikehara Tsukayama (Pontificia Universidad Catolica de Chile)

## (11) 基盤研究 (A) 琉球帝国からみた東アジア海域世界の流動的様態と国家 2018～2021年度 (研究代表者 村木 二郎)

### 1. 目的

世界史上の大航海時代より以前に、早くも14世紀代から東アジア海域世界では活発な交易がおこなわれていた。それを牽引した琉球は、単なる受動的な中継貿易国家ではなく、諸外国と複雑な外交交渉をおこない、積極的な交易活動を展開した海洋国家であった。その活動過程で、言語も習俗も異なる宮古・八重山や奄美に侵攻し、在地社会を大きく変化させた。その痕跡は、遺跡や遺物、伝承に残るのみである。本研究では、これまでほとんど注目されてこなかった琉球の帝國的側面に新たに視点を据え、中世後半の東アジア海域世界の多様かつ流動的な様態を捉え直す。その際、これまで独擅場であった文献史学による研究に目を配りながらも、集落構造や流通、技術に着目し、考古学、民俗学、分析化学等のさまざまな手法により、新たな歴史像を探る。そして、歴史的一断面から設定された現在の国境の必然性を問うことで、「国家」とは何かを歴史学の立場から提言するための実証的素材を整える。

### 2. 今年度の研究計画

本研究は、琉球の周辺地域から古琉球史を見つめなおすことを目的とする。そのためには、周辺地域の資料を渉猟する必要がある。これまでの当該研究は、主として文献史料をもとに描かれてきたが、既存の文献史料を素材とする限り、従来の研究から脱却することは難しい。というも、奄美・先島を中心とした琉球周辺地域には同時代の文献史料がほとんど存在しないため、後世の琉球王府による編纂物に頼るしかなく、結果として琉球王府史観によって周辺地域を捉えざるを得ないのである。しかし、それらの地域には遺跡があり、遺物がある。これらの考古資料を整理、分析することで、新たな素材を増やし、周辺地域独自の文化を明らかにする基礎作業が重要となる。

最終年度である第4年度は、喜界島、与論島、八重山の陶磁器調査、および沖縄本島、南九州の陶磁器調査を実施して、引き続きデータの蓄積を図る。手法としては、特定の遺跡（遺構）出土の貿易陶磁器を、同一基準で全点カウントする。沖縄独自の分類基準ではなく、全国的に通用する基準を用いることで、当該地域以外の情報とも比較可能である。

文献調査班は南九州の文献資料とそれに関する現地調査を実施する。

資料については考古班、文献班で分担しておこなうが、遺跡の踏査はできる限り全体で行動し、情報や考えを共有して進めていく。そのための研究会を春（国立歴史民俗博物館）、秋（沖縄）、冬（国立歴史民俗博物館）に実施し、研究報告を重ねていくこととする。

なお、昨年度末から国立歴史民俗博物館で開催している新特集展示「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」に関連して研究分担者がギャラリートークを実施し、研究成果の一般への公開を図る。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

- 4月 新特集展示「海の帝国琉球—八重山・宮古・奄美からみた中世—」ギャラリートークWeb配信
- 6月9～10日 調査 於：奥山荘城歴史館  
江上館跡、坊城館跡、下町坊城遺跡出土陶磁器調査
- 6月22～24日 調査 於：与論町教育委員会、喜界町教育委員会  
与論島与論城跡出土陶磁器調査、喜界島城久遺跡群大ウフ遺跡・手久津久遺跡群中増遺跡出土陶磁器調査
- 9月29日～10月2日 於：益田市教育委員会  
沖手遺跡、中須西原・東原遺跡出土陶磁器調査
- 10月7日～8日 於：宮古島市教育委員会、石垣市教育委員会  
宮古島ミヌズマ遺跡・住屋遺跡出土陶磁器調査、石垣島フルスト原遺跡出土陶磁器調査
- 1月14日～17日 於：多良木町埋蔵文化財等センター

相良頼景館跡, 青蓮寺出土陶磁器調査, 町内石造物等調査

コロナ禍のため, 特に離島での調査に支障があった。そこで良好な資料を有する奥山荘関連遺跡や益田港湾遺跡, 相良氏関連遺跡など, 比較対象資料のデータを蓄積した。幸い, 科研費の繰越しが認められたため, 来年度に第5年度として調査を実施して成果をまとめたい。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

##### 【研究分担者】

池田 榮史 國學院大學研究開発推進機構・教授  
 黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授  
 鈴木 康之 県立広島大学地域創生学部・教授  
 関 周一 宮崎大学教育学部・教授  
 中島 圭一 慶應義塾大学文学部・教授  
 渡辺 美季 東京大学大学院総合文化研究科・准教授  
 荒木 和憲 本館研究部・准教授  
 齋藤 努 本館研究部・教授  
 田中 大喜 本館研究部・准教授  
 松田 睦彦 本館研究部・准教授  
 ◎村木 二郎 本館研究部・准教授

##### 【連携研究者】

岡本 弘道 県立広島大学地域創生学部・准教授

##### 【研究協力者】

池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員  
 岩元 康成 始良市教育委員会・主事  
 小野 正敏 本館・名誉教授  
 久貝 弥嗣 宮古島市教育委員会・係長  
 小出麻友美 千葉県教育庁文化財課・文化財主事  
 佐々木健策 小田原市文化財課・係長  
 山本 正昭 沖縄県立博物館・美術館・主任学芸員

## (12) 基盤研究 (A)

### 単年輪14C測定による較正曲線の地域効果・微細構造の解明

2018~2021年度

(研究代表者 坂本 稔)

#### 1. 目的

放射性炭素年代法は, 炭素14 (14C) の半減期に基づく年代測定法であり, 考古学や地球惑星科学などの諸分野で広く利用されている。測定値 (炭素14濃度) から数値年代を得るにはIntCalなどの「較正曲線」を用いるが, そのデータの多くは欧米産樹木から得られたものである。較正曲線の改善は年代測定の精度・確度の向上に直結することから, 全世界的に研究が進められている。代表者らはその過程で, 日本産樹木の炭素14濃度がIntCalとずれる年代があることを見出した。本邦での年代測定において, このようなずれは年代値の誤差を生むことにつながり, より正確な年代決定のための較正曲線が必要である。本研究は人類の歴史に重要な過去2000年間について, IntCalの解像度を上回る1年分解能の較正曲線の確立を目的とする。このような較正曲線が得られれば, 年代測定の精度が画期的に改善するだけでなく, 14Cを指標とした太陽物理などの自然科学分野にも影響を与える。

#### 2. 今年度の研究計画

最終年度にあたり, 5年輪を1試料としたこれまでの日本産樹木年輪との接続を目的とした, 空白域の単年輪炭素14年代測定を進める。国内外の研究機関との連携も進め, 効率的な測定の実施を目指す。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

昨年度までに隔年で測定していた、鹿屋市白水B遺跡出土センダン（1053～921BC）残余分の14C測定を実施した。較正曲線IntCal20と比較すると、1000BC前後の炭素14年代は上位に、それ以降の前9世紀代は下位にある傾向が鮮明となった。なお、昨年度再現されないとした前9世紀代の挙動は測定の不具合であった可能性が示され、検証を急いでいる。

IntCal20改訂の根拠となった日本産樹木年輪に対し、昨年度測定した釜山広域市古村里遺跡出土ノグルミ材（AD81～168）はむしろ改訂前のIntCal13に近い挙動を示していた。今年度は同遺跡出土の別のノグルミ材（AD131～211）の単年輪炭素14年代測定を、韓国地質調査所に依頼して実施した。両資料の重複した時期の炭素14年代の挙動はほぼ同調し、2世紀代はIntCal20とIntCal13のほぼ中間に位置した。大気中14C濃度の違いは時期・地域によって異なることが示され、次期IntCalの改訂に向けて一層のデータ充実が求められる。

一昨年度までに測定した津市専修寺ヒノキ材（～AD1436）と坂井市丸岡城ケヤキ材（AD1462～）との間の単年輪炭素14年代測定の空白域を、姫路市圓教寺ケヤキ材（AD1427～1467）で接続した。なお、専修寺ヒノキ材の単年輪炭素14年代測定はAD1144まで遡上したが、資料自体はAD1068まで年輪を有し、しかも本研究では隔年の測定にとどまった。隔年では炭素14年代の微細な挙動を検討するには十分ではなく、追加測定が必要である。

16世紀代の伊勢神宮神域スギ（AD1519～）の測定を実施し、昨年度までの測定、及び青葉神社ヒノキ材の測定と合わせ、AD1810までの単年輪炭素14年代を接続させた。近世に要求される高い精度の年代較正には、単年輪炭素14年代測定による微細な構造を再現した較正曲線が必要である。幸いにも2020年7月に倒壊した瑞浪市大湫神社新明スギを入手し、過去670年分の樹木年輪を確保できた。現地に近い日本原子力研究開発機構発機機構との共同研究により測定を進める計画である。

先行研究と本研究により、過去3,000年分の日本産樹木の炭素14年代測定を接続することができた。複数年輪を1試料とした炭素14年代測定、及び隔年の炭素14年代測定も多く含まれるが、来年度の科学研究費の採択を受け、今後も充実を図っていく。なお、研究代表者は今年度、第82回応用物理学会秋季学術講演会、文化財科学会第38回大会、及び第15回国際加速器質量分析シンポジウム（AMS-15）で報告を行った。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎坂本 稔 本館研究部・教授  
 箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員  
 木村 勝彦 福島大学・共生システム理工学部・教授  
 三宅 美沙 名古屋大学・宇宙地球環境研究所・准教授  
 中尾 七重 山形大学・理学部・研究員  
 尾崎 大真 東京大学・総合研究博物館・特任研究員

### (13) 基盤研究（A）

過去3万年の極端気候・極端災害史の精密編年に向けた新しい年輪年代法の基盤研究

2020～2024年度

（研究代表者 箱崎 真隆）

#### 1. 目的

日本の年輪年代法は2010年代に飛躍的な発展を遂げ、従来法では過去3000年間であった年代測定範囲が過去5100年間まで拡張された。その背景には「酸素同位体比年輪年代法」と「炭素14スパイクマッチング」の確立・実用化がある。本研究は、応募者らがこれまでの研究で集めた過去3万年間の樹木年輪試料を用いて、1年単位の酸素同位体比分析および放射性炭素（炭素14）分析を網羅的に実施し、そのデータを解析することにより、日本列島周辺で起きた極端災害・極端気候を精密に編年する。さらには、最終氷期最寒冷期（LGM）の気候を1年～数百年のスケールで復元し他の時代との共通点や相違点を把握する。

#### 2. 今年度の研究計画

本年度は、標準年輪曲線の延長のため、若狭三方縄文博物館にある埋没木のサンプリングおよび酸素同位体比分析を優先して実施する。また、昨年度新型コロナウイルス感染症のために実施できなかった「7.3ka鬼界アカホヤ噴火発生年」の決定に向けた屋久島での埋没木調査を実施する。4.2-4.3kaイベントの精密復元を目指して、各地の埋没木試料を追加入手し酸素同位体比分析を実施する。昨年度に引き続き、国際標準暦年較正曲線IntCalの基盤デー

タを日本産および韓国産樹木網羅的な炭素14分析によって獲得する。以上を計画した。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は昨年度に引き続き、新型コロナウイルスの影響によって長期出張が不可能であった。このため、予定していた屋久島での「7.3ka鬼界アカホヤ噴火発生年の決定」に向けた埋没木調査、「4.2-4.3kaイベントの精密復元」に向けた若狭三方縄文博物館収蔵スギ埋没木のサンプリングは、次年度に繰り越しとなった。一方で、福島県阿賀野川水系から新たに発見された5400年前の埋没木、神奈川県西富岡・向畑遺跡の3000年前の埋没木、東京都日野市No.16遺跡出土の縄文—古墳時代の木材など、時代・地域的に重要な新規サンプルの獲得ができ、酸素同位体比標準年輪曲線の時空間的空白が拡充される見通しが立った。分担者の三宅美沙、坂本稔によって、過去1万年間の樹木年輪炭素14データの獲得は着実に進んでおり、次期較正曲線の高精度化への貢献は確実である。前年度に縄文時代後期の広葉樹の埋没木としては日本で初めて年代決定が成功した福井城跡出土木材の成果について、日本文化財科学会で発表した結果、第15回ポスター賞を受賞し、文化財科学の分野で高い評価を得た。また、前年度、樹齢分析を行なった岐阜県大湫町神明神社の大杉に関する成果を市民向け研究会で発表した結果、中日新聞や岐阜新聞に報じられ、当方の研究活動の意義を広く社会にアピールすることができた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員  
 木村 勝彦 福島大学共生システム理工学類・教授  
 三宅 美沙 名古屋大学宇宙地球環境研究所・准教授  
 坂本 稔 本館研究部・教授

## (14) 基盤研究（B）

文化の主体的継承のための民俗誌の構築—マルチメディアの活用と協働作業を通じて  
 2018～2022年度  
 （研究代表者 川村 清志）

### 1. 目的

本研究の目的は、日本の地域社会が失いつつある生活文化の諸相を持続的に継承し、活用するための基盤となる、マルチメディアを用いた民俗誌を作成することにある。

この研究の意義として、①人類学、民俗学の民俗誌記述における理論的、倫理的な課題の克服、②現代的メディア状況に対応した民俗誌実践の試み、③地域社会への持続的な文化支援という側面を持っている。民俗誌は、対象とする社会の生活文化を全体的に記録することを目的としている。本研究では、日本の地域社会において研究者と現地の人びとの対話と協働を通して、多様な価値観と視点を内包した、自己表象としての民俗誌を共に創出する。文字情報はもちろん、画像や動画を用いてネット上での公開も視野に入れた民俗誌であり、人びと自身が主体的に選択し、積極的に継承、活用しようとする文化についての更新可能な—メディアを通じて文化実践を上書できる—記録の構築を目指す。

### 2. 今年度の研究計画

2021年度は、昨年度のコロナ禍のために、予定していたフィールドワークと映像撮影の多くが実施できなかった。今年度も予断を許さない状況にあるが、可能な限り各調査地における協働調査を実施する方向で計画を立てていく。以前から調査をしていた地域では、現地との協働作業が断続的にはあれ行えたことで、その成果の一端を継続して示しつつある。今年度は、これらの先行地域での成果を基礎としながら、他地域においても同様のコラボレーション体制を構築しながら具体的な調査活動を継続していきたい。

まず、先行的な調査地として石川県輪島市において、これまでの調査と成果を基礎として、祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』の補完調査と現地での協働作業を継続していく。『祭日編』では文字通り祭りの当日に関するフォトエスノグラフィーの作成を、地元の青年会とそのOBとの協働作業によって遂行した。これを受けて過疎化による地域の空洞化が進む今日の状況を活写するために、地域を離れた青年会員たちの映像民俗誌の調査を彼らの協力をもとに実施する。同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の団体や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに、震災以後の文化復興に関するビジュ

アル民俗誌の制作を進める。

また、一昨年の調査からほぼ滞っていた宮城県気仙沼市については、地域の文化として表象される虎舞と鹿踊りに注目しつつ、それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサステナブルな文化継承のあり方について、夏から秋の調査を予定している。同様に沖縄県宮古島でも、地域の伝統的な祭祀組織の危機的状況に際して、積極的な提言を行い、情報発信を行っているキーパーソンとの協働作業のもとに、研究者のポジショナリティを活かした文化支援のあり方を模索していく。さらに兵庫県明石市については、秋から冬にかけて、現地と研究者を仲介するコラボレーター存在に注目し、その社会的文化的な特質をインタビューと映像記録にまとめていく方向で、調査を継続していく。

なお宮古島に関しては研究分担者の内田順子が、鹿児島県屋久島については柴崎茂光が、各々の調査経験を活かしつつ、協働作業による民俗誌の調査活動に従事する。また、同県奄美地方については、岡田浩樹がデジタルデバイスを用いた広域にわたる調査実践を継続する予定である。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

2020年度に引き続き今年度も、コロナ禍のために、予定していたフィールドワークと映像撮影の多くが実施できなかった。結果的に今年度は、すでに資料の蓄積のあった地域についての成果物の整理とその公開を中心に行うことになった。

まず、調査地である石川県輪島市において夏祭りのフォトエスノグラフィー『石川県輪島市皆月山王祭 祭日編』を一般に紹介し、成果を視覚化するためにフォトエッセー『曳山に集いて明日を見つめて』を3回に分けて『REKIHAKU』誌上に連載した。また、コロナ禍が拍車をかけた地域の空洞化を象徴する春祭り行事の縮小と行事の縮小を同地区の青年会の視点から捉え直した『春祭りをもう一度—皆月青年会の軌跡—』を製作し、「東京ドキュメンタリー映画祭」に出品した。極めて制限された環境の中で、地域の内外の青年会員たちの暮らしを映像民俗誌として記録するための調査を彼らとの協力のもとに継続した。同じく先行的な地域である宮城県七ヶ浜町では、地域の団体や東日本大震災以後のNPO活動に従事していた人たちとの協働作業のもとに震災以後の文化復興に関する映像民俗誌の制作を進め、「震災の記憶をつなぐ—あの日の僕、七ヶ浜3.11—」として完成させた。また、これまでのフィールドワークの記録と震災以後の営みについてのインタビューを、ブックレット『あの日の僕—七ヶ浜3.11—』としてまとめた。

宮城県気仙沼市については、地域の文化として表象される虎舞と鹿踊りに注目しつつ、それらの文化財化に尽力したキーパーソンとの協働作業のもとにサステナブルな文化継承のあり方についての調査を行った。沖縄県宮古島についても、地域の伝統的な祭祀組織の危機的状況に際して、積極的な提言を行い、情報発信を行っているキーパーソンとの協働作業のもとに、研究者のポジショナリティを活かした文化支援のあり方を模索した。ただしコロナ禍により実際の調査を行うことはできなかったため、これまで撮影した映像資料の整理作業に従事した。また、兵庫県明石市についても、実地での調査が十分にできなかったため、これまでの聞き取り資料や映像資料のアーカイブ化に務めた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎川村 清志 本館研究部・准教授  
岡田 浩樹 神戸大学・国際文化学研究所・教授  
内田 順子 本館研究部・教授

## (15) 基盤研究（B）

古代日本と朝鮮の金石文にみる東アジア文字文化の地域的展開

2019～2022年度

（研究代表者 三上 喜孝）

### 1. 目的

本研究課題は、日本列島と朝鮮半島の漢字文化の展開と変容の実態を、石碑や墓誌、鐘銘や印章などの金石文を素材に考察することを目的とする。本研究課題が対象とする古代の日本列島や朝鮮半島は、中国の漢字文化が受容され、それがさらに地域社会の隅々まで浸透していく時代であった。漢字は、官僚や豪族による行政文書の作成という政治利用だけでなく、仏教・儒教などの思想や儀礼の広まりにおいても大きな役割を果たした。こうした実態を知る手がかりとしては、石や金属器に刻まれた金石文が重要な資料となるが、これまで金石文を分析する手法が

韓国と日本で共有されていなかったため、その比較研究が難しかった。そこで本研究課題では、古代日本と朝鮮の金石文の比較研究の手法を開発し、さらには漢字文化とそれに付随する思想や儀礼が東アジアの各地域社会にどのように浸透していったか、その実態を、金石文を通じて解明することを主眼とする。

## 2. 今年度の研究計画

調査カードを作成し、対象となる時期（6～11世紀）の日本と朝鮮半島の金石文についてこれまでの積文や研究を集成する。

韓国において、資料調査を行う。とくに、韓国の国立中央博物館や国立慶州博物館をはじめとする博物館所蔵の6～11世紀の金石文のうち、とくに問題となる金石文について可能な限り実見調査を行う。調査の際には韓国の研究協力者にも同行してもらい、金石文解読や調査手法の共有化をはかる。

国内（国立歴史民俗博物館や東京大学史料編纂所）で研究会を複数回開催し、積文の検討や日韓金石文資料の比較検討、さらには研究発表を行い、研究分担者の間で意見交換を行う。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度も、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、韓国における資料調査を行うことができなかった。その代わりに、オンラインによる国際学術会議への参加、国際研究集会の実施等を行った。

### 〔研究経過〕

2022年2月23日、慶北大学校人文学術院HK+事業団・国立歴史民俗博物館共同主催による学術大会『古代韓国と日本の文字文化と書写材料』を実施し、本科研が後援をした。オンラインにより開催し、日韓の研究者合わせて50名ほどの参加を得た。当日のプログラムは、以下の通りである。

### プログラム

- |             |       |  |
|-------------|-------|--|
| 13:00～13:10 | 挨拶    | 尹在碩（慶北大学人文学術院長）、西谷大（国立歴史民俗博物館長）                      |
| 13:10～13:20 | 趣旨説明  | 三上喜孝（国立歴史民俗博物館）                                      |
| 13:20～13:50 | 研究発表1 | 「慶山・所月里木簡の性格—新羅村落文書との比較および形態的特徴より」<br>橋本繁（慶北大学人文学術院） |
| 13:50～14:20 | 研究発表2 | 「正倉院宝物にみる紙木併用」<br>佐々田悠（宮内庁正倉院事務所）                    |
| 14:20～14:50 | 研究発表3 | 「形式論からみた新羅村落文書—構造・書式と用語」<br>李鎔賢（慶北大学人文学術院）           |
| （休憩）        |       |  |
| 15:00～15:30 | 研究発表4 | 「銘文刀剣からみた古代日韓関係」<br>金跳咏（慶北大学人文学術院）                   |
| 15:30～16:00 | 研究発表5 | 「宗教からみた古代日韓の石と文字の文化」<br>堀裕（東北大学大学院文学研究科）             |
| 16:00～16:30 | 研究発表6 | 「『開仙寺石灯記』の外的性格に関する2,3の問題」<br>赤羽目匡由（東京都立大学人文社会学部）     |
| （休憩）        |       |  |
| 16:40～18:00 | 総合討論  | 討論：李東柱（慶北大学人文学術院）、畑中彩子（東海大学）<br>通訳：方国花（慶北大学人文学術院）    |

### 〔研究成果〕

今年度も昨年度に引き続き、韓国での資料調査については、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、やむなく実施を断念せざるを得なかった。代わりに、オンラインによる国際学術会議への参加・発表や国際研究集会の実施を積極的に行った。

資料収集については、韓国の古代～高麗前期までの金石文を中心に、基礎的なデータの収集と入力につとめた。今年度の研究業績は、以下の通りである。

### 【書籍】

・植田喜兵成智『新羅・唐関係と百済・高句麗遺民—古代東アジア国際関係の変化と再編』山川出版社、2022年3

月30日, 368頁, 単著

- ・吉澤誠一郎監修, 石川博樹・太田淳・太田信宏・小笠原弘幸・宮宅潔・四日市康博編著『論点・東洋史学』ミネルヴァ書房, 2022年1月, 378頁(担当範囲: 赤羽目匡由「唐の冊封体制」, pp.60-61)
- ・橋本繁『日本木簡総覧(全3巻)』周留城出版社, ソウル, 2022年1月, 共著

#### 【論文】

- ・赤羽目匡由「則天武后末期の東方情勢に関する一問題—渤海における則天武后の影響と残像—」『唐代史研究』24, 2021年8月, pp.57-79, 査読無
- ・赤羽目匡由「新羅東北境における炭項関門の築造年代と「泉井郡」の称」『朝鮮学報』258, 2021年12月, pp.197-214, 査読有
- ・稲田奈津子「東アジア儀礼研究の新しい視角—物品目録の検討から—」(韓国語) 韓国・慶北大学校人文学術院『東西人文』16, 2021年8月, pp.571-595, 査読有
- ・稲田奈津子「東アジア儀礼研究の新視角—「物品目録」の検討から—」(韓国語) 慶北大学校人文学術院(韓国)『東西人文』16, pp.571~595, 2021年8月31日, 査読有
- ・稲田奈津子・西本哲也「東アジアの律令制」鈴木靖民監修, 高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』八木書店, pp.261~273, 2021年11月20日, 査読無
- ・植田喜兵成智「日本學界의 『翰苑』研究 動向과 課題 —7世紀 資料로서 活用하기 위한 試論—」(日本語訳「日本における『翰苑』研究の動向と課題—7世紀資料として活用するための試論」)『白山学報』120, pp.179-197, 2021年8月, 査読有
- ・植田喜兵成智「高句麗遺民墓誌研究の動向と争点」古畑徹編『高句麗・渤海史の射程—古代東北アジア史研究の新動向—』汲古書院, pp.85-100, 2022年2月, 査読無
- ・橋本繁「新羅文書木簡の基礎的検討—新出土月城垓子木簡を中心に」『嶺南学』77, 2021年6月, pp.187-222, 査読有。
- ・橋本繁「韓国出土『論語』木簡の原形復元と用途」(韓国語) 韓国木簡学会『木簡と文字』26, pp.111-123, 2021年6月, 査読有
- ・橋本繁「釜山盃山城木簡の基礎的検討—佐波理加盤付属文書との比較を中心に」『新羅史学報』52, pp.455-476, 2021年8月, 査読有。
- ・橋本繁「日本と朝鮮の石刻史料」鈴木靖民監修・高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』八木書店, pp.98-104, 2021年11月, 査読無。
- ・三上喜孝「日本出土の古代木簡—戸籍と木簡—」(韓国語) 韓国木簡学会『木簡と文字』26, 2021年6月, pp.327-334, 査読有
- ・三上喜孝「古代日本における人面墨書土器と祭祀」(日本語) 韓国・慶北大学校人文学術院『東西人文』16, 2021年8月, pp.301-315, 査読有
- ・三上喜孝「東アジアの木簡」鈴木靖民監修・高久健二・田中史生・浜田久美子編『古代日本対外交流史事典』八木書店, 2021年11月, pp.105-109, 査読無
- ・三上喜孝「韓日本簡からみた古代東アジアの医薬文化」(韓国語) 韓国・慶北大学校人文学術院『東西人文』17, 2021年12月, pp.177-195, 査読有
- ・三上喜孝「古代日本の論語木簡の特質—韓半島出土の論語木簡との比較を通して—」(韓国語)『慶北大学校人文学術院HK+事業団研究叢書1 東アジアの論語の伝播と桂陽山城』, 2022年1月, pp.341-360, 査読有
- ・三上喜孝「古代日本における人面墨書土器と祭祀」(韓国語)『慶北大学校人文学術院HK+事業団研究叢書02 慶山市所月里木簡の総合的検討』2022年1月, pp.425-438, 査読有
- ・三上喜孝「漢字文化の東アジア的展開と列島世界」吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編『地域の古代日本 東アジアと日本』KADOKAWA, 2022年2月, pp.169-205, 査読無
- ・三上喜孝「出土文字資料から見た払田柵の機能」『国立歴史民俗博物館研究報告』第232集, 2022年2月, pp.277-286, 査読有
- ・三上喜孝「出土文字資料の集成的研究 平泉出土文字資料へのアプローチ(2)片仮名木簡」『平泉学研究年報』2, 2022年3月, 査読無

#### 【口頭発表】

- ・赤羽目匡由「「開仙寺石燈記」の外的性格に関する二, 三の問題」慶北大学校人文学術院HK+事業団・国立歴史民俗博物館共同学術大会『古代韓国と日本の文字文化と書写材料』, 2022年2月23日, オンライン
- ・稲田奈津子「日本古代の墓誌と東アジア」東京大学ヒューマニティーズセンター第41回オープンセミナー「東アジアのなかの墓誌」, 2021年9月3日, オンライン

- ・稲田奈津子「日本古代的殯（mogari）與女性」「東亞宗教與王權」工作坊（中央研究院「東亞文化意象的博物書寫與物質文化」主題計畫・科技部「年號與東亞古代王權」專題計畫），2021年12月10日，オンライン
- ・稲田奈津子「東アジアの古代儀礼を復元するー西域・長安・平城京」トンボの眼，2021年12月14日，オンライン・オンデマンド
- ・橋本繁「慶山・所月里木簡の性格」慶北大学校人文学術院HK+事業団・国立歴史民俗博物館共同学術大会『古代韓国と日本の文字文化と書写材料』，2022年2月23日，オンライン
- ・堀裕「東アジア宗教史と古代日本」（国史談話会大会講演），2021年6月12日，オンライン
- ・堀裕「日本の大極殿と宮中における仏事の展開」『第2回宮と都の東アジア比較宗教史シンポジウムー日本・宋・高麗・契丹ー』，2021年11月7日，オンライン
- ・堀裕「宗教からみた古代日韓の石と文字の文化」慶北大学校人文学術院HK+事業団・国立歴史民俗博物館共同学術大会『古代韓国と日本の文字文化と書写材料』，2022年2月23日，オンライン
- ・三上喜孝「古代日本における人面墨書土器と祭祀」（韓国・国立慶北大学校人文学術院HK+事業団第3回国際学術大会「慶山 所月里木簡の総合的検討」，2021年4月27日，オンライン
- ・三上喜孝「出土文字資料の集成的研究」平泉学研究会〔主催：岩手大学〕，2022年2月5日，オンライン

## 【資料紹介】

- ・武田幸男解説・翻刻，稲田奈津子・三上喜孝編「水谷悌二郎日記（抄）」『国立歴史民俗博物館研究報告』第234集，2022年3月，査読有，pp.37-120

## 【書評】

- ・赤羽目匡由「書評と紹介 鈴木靖民著『古代の日本と東アジア』」『日本歴史』882，2021年11月，pp.85-87

## 【翻訳】

木簡学会編『목간에서 고대가 보인다(木簡から古代がみえる)』周留城出版社，ソウル，2022年1月（共訳者，橋本繁）

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

- 赤羽目匡由 東京都立大学大学院人文科学研究科・准教授
- 稲田奈津子 東京大学史料編纂所・准教授
- 植田喜兵成智 学習院大学東洋文化研究所・助教
- 橋本 繁 韓国・慶北大学人文学術院HK研究教授（研究協力者）
- 畑中 彩子 東海大学文学部・准教授
- 堀 裕 東北大学大学院文学研究科・准教授

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

## (16) 基盤研究（B） 西遷・北遷東国武士の社会的権力化 2019～2022年度 （研究代表者 田中 大喜）

## 1. 目的

本研究の目的は，13世紀後半～14世紀にかけて顕著になった，西遷・北遷と呼ばれる東国武士の西国や東北地域の所領への移住の実態について明らかにすることにある。東国武士は，日常的に交流してきた在来諸勢力との社会的合意を形成することによって，西遷・北遷先の所領に形成されていた地域社会を統合・編成する主体（権力）になることができた。本研究では，こうした現象を西遷・北遷東国武士の社会的権力化と捉え，東国武士の西遷・北遷という歴史事象の本質と理解し，その実態を究明する。

その際，本研究では西遷・北遷東国武士と在来諸勢力とを相互規定的な関係にあるものと捉えるため，文献資料・出土遺物・石造物・仏像等，両者の多様な諸資料を広く収集・分析し，文献史学・考古学・美術史学・民俗学・歴史地理学による総合的研究として進める。これにより，両者の社会的合意の内実を立体的に究明し，東国武士の西遷・北遷の歴史像を実証的に一新する。

## 2. 今年度の研究計画

7月中旬に昨年度新型コロナウイルスの感染拡大のために実施できなかった，一昨年度の第1回目の小城資料調査の続きを実施し，8月中旬に調査成果のとりまとめを行う。同様の理由により昨年度実施できなかった第2回目の郡

山資料調査は、今年度も調査再開の目途が立たないと予想されるため、調査対象地を広島県三原市に変更して実施する。

9月から12月にかけて、宗教資料班・文献資料班・歴史地理班・考古班・民俗班ごとに肥前国小城郡域および安芸国沼田荘域の現地調査を行う。宗教資料班は、小城郡・沼田荘域の中世石造物と中世仏像を調査し、金石文・胎内銘・仏像様式等から当該地域の東国武士と在来諸勢力の動向を抽出する。歴史地理班は、小城郡・沼田荘域の近世地誌・絵図、地方文書、明治期地籍図から抽出した情報をもとに現地での聞き取り調査と水利調査を進める。これらにより、両地域の東国武士・在来諸勢力双方の拠点および地域開発に関わる基礎データを集積する。考古班は、小城郡・沼田荘域の中世城館・集落・集散地遺跡の出土遺物を悉皆調査し、当該地域の城館・集落・集散地の消長を抽出する。民俗班は、小城郡・沼田荘域の近現代の生業と信仰に関する現地での聞き取り調査を実施し、当該地域の風土的特質を抽出する。そして、文献資料班は、刊本から安芸小早川氏に関わる文献資料を抽出・整理する作業を進める。

1月から2月にかけて、班ごとに調査データをフォーマットに入力して整理する作業を進める。また、整理した作業データは研究代表者へ送り、集約する。

3月中に国立歴史民俗博物館において研究会を開催する。班ごとに昨年度と今年度の調査成果を報告し、研究分担者・研究協力者全員でこれを検討して、情報の共有化を図る。また、資料調査データの組織的運用・公開体制の構築に向けた検討も行う。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度も新型コロナウイルスの感染拡大を予防するための緊急事態宣言とまん延防止等重点措置の断続的な発出を受け、資料調査は大きな制約を受けた。そのため、昨年度優先的に進めることにした佐賀県小城市域での補足的な資料調査を行う一方、新潟県胎内市域での資料調査に着手するにとどまった。歴史地理班は小城郡域の水利灌溉調査を7月と2月に、奥山荘域の水利灌溉調査を9月と1月に行った。また、考古班は小城郡域の出土遺物の調査を7月に行った。

コロナ禍で大きな制約を受けたものの、この3年間で小城市域での資料調査はほぼ目的を達することができた。この調査成果をベースに、3月に国立歴史民俗博物館にて企画展示「中世武士団―地域に生きた武家の領主―」を開催した。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

#### 【研究分担者】

- ◎田中 大喜 本館研究部・准教授
- 井上 聡 東京大学史料編纂所・准教授
- 貴田 潔 静岡大学人文社会科学部・准教授
- 黒嶋 敏 東京大学史料編纂所・准教授
- 神野 祐太 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員
- 鈴木 康之 県立広島大学人間文化学部・教授
- 高橋 典幸 東京大学大学院人文社会系研究科・教授
- 松田 陸彦 本館研究部・准教授
- 村木 二郎 本館研究部・准教授
- 湯浅 治久 専修大学文学部・教授
- 渡邊 浩貴 神奈川県立歴史博物館学芸部・学芸員

#### 【連携研究者】

- 荒木 和憲 本館研究部・准教授
- 後藤 真 本館研究部・准教授

#### 【研究協力者】

- 池谷 初恵 伊豆の国市教育委員会・文化財調査員
- 小野 正敏 本館・名誉教授
- 栗木 崇 熱海市教育委員会・学芸員
- 佐々木健策 小田原市文化財課・係長
- 田久保佳寛 小城市教育委員会・係長
- 竹下 正博 佐賀城本丸歴史館・課長

土山 祐之 本館・資料整理等補助員

(17) 基盤研究 (B)  
「隠し売女」から「淫売女」へ—近世近代移行期における売春観の変容2019～2021年度  
(研究代表者 横山 百合子)

1. 目的

1872年発令の芸娼妓解放令は、“遊女にはその身体を所有する者がいて性を売らされている”とみる近世社会の通念が、売春は“自ら売る淫らな女”によるものとする近代の売春観に変わる起点となった。本研究では、これを近代売春観の起点となる“売春の再定義”として位置づけ、そのような転換が行われた歴史的事情を、地域社会や遊女自身の“再定義”の受け止め、および売春に対する国際社会の動向や性感染症に対応する近代医学の進展なども視野に入れて解明することを目的とする。このような考察を通して、従来一片の紙切れとされてきた解放令の歴史的位置づけを刷新すると同時に、“再定義”によって進行した、売らせる者や買う男性の不可視化、娼婦へのまなごしの変化、さらには娼婦自身が売春をスティグマとして内面化する過程を明らかにし、近世近代移行期の社会像を連続と断絶の両面から描くことを目指す。

2. 今年度の研究計画

最終年度である本年は、第1・2年度のうち未了分の史料調査および整理を進め、3年間の成果のとりまとめを行う。また、第2年度に開催した企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」を含め、社会的な成果発信にも努める。具体的な計画は、以下の通りである。

- ①研究代表者および分担者の研究課題である、維新期の「売春の再定義」の前提をなす近世遊廓の身分的統治とそのジェンダー抑圧的側面（横山）、近世近代移行期の遊廓が孕む矛盾の具体相（横山）、解放令以降の地域医療環境をふまえた芸娼妓の検梅/性感染症罹患の実態（廣川）、さらに明治後期までを視野にいたした横浜での外国人向けの買売春状況の解明（森田）を進め、近世・近代の連続と断絶を、性の売買の側面から描くことをめざす。なお、外交的背景をふまえた解放令制定過程の解明は、新型コロナ禍での海外調査の有無にもよるため、可能な範囲で進捗を図る。
- ②研究の総括的発信として、年度末にシンポジウムを開催する。会場は、分担者森田朋子の所属先である中部大学での開催を予定している。
- ③本研究の第2年度開催の歴博企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」については、一般向けの新書刊行が予定されており、積極的に本研究成果を反映させる。また、学生・大学院生・学生・市民向講演など、広く研究成果の発信にも努める。

3. 今年度の研究経過及び成果

第2年度に続き、医療関係資料や東京都公文書館史料調査を継続して実施し、上記計画の①②③のうち、海外調査が必要な課題以外について、概ね達成することができた。最終的な成果発信としてのシンポジウムは、中部大学の協力を得て共催により実施した。

【論文】

横山百合子「遊廓の明治維新—身分とジェンダーの視点から—」『人民の歴史学』231, 2022年, pp.14-25

横山百合子「書評 沢山美果子著『性からよむ江戸時代—生活の現場から—』」『歴史評論』864, 2022年, pp.91-95

廣川 和花「『隔離』と『療養』を再考する：COVID-19と近代日本の感染症対策」『専修人文論集』109, 2021年, pp.235-256

【学会報告等】

横山百合子「国立歴史民俗博物館企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」—成果と課題 私論」大阪歴史科学協議会5月例会, 2021年5月

横山百合子「遊廓の明治維新—身分とジェンダーの視点から—」東京歴史科学研究会入門講座, 2021年6月

横山百合子「歴史から見る社会システムのジェンダー化—企画展示「性差（ジェンダー）の日本史」を素材として」京都大学人文科学研究所性差の研究会, 2021年11月

横山百合子「遊廓からみた明治維新—日本洋画の父 高橋由一の油彩画「花魁」をめぐって—」横須賀開国史研究会総会, 2021年12月

- 横山百合子「芸能から性の搾取まで—「遊女」の歴史をふりかえる—」総合研究大学院大学文化フォーラム, 2021年12月
- 横山百合子“Comment: Characteristics of the Recent International Researches on the Meiji Restoration”, 7th Biennial International e-Conference of the Japanese Studies Association for Southeast Asia, Plenary Session, 2021年12月
- 横山百合子「展示を創る—女性史・ジェンダー史の豊かさの中で—」東京女子大学, 2021年度第36回女性史青山なを賞特別賞公開講演会, 2022年1月
- 横山百合子「徐智瑛氏「植民地時代における妓生の研究（I）—妓生集団の近代的再編の様相を中心に—」へのコメント」2021年度植民地遊廓科学研究会, 2022年2月
- 森田朋子「明治期横浜におけるラシャメンの事例—ミルラー事件を手掛かりに—」シンポジウム「幕末から近代における性の売買」中部大学人文学部歴史地理学科・大学院国際人間学研究科歴史学・地理学専攻主催, 科研(B)「「隠し売女」から「淫売女」へ—近世近代移行期における売春観の変容」/同「一次史料に基づく近世～近代日本の「遊廓社会」に関する総合的研究」共催, 2022年2月
- 廣川 和花「医療史から読み解く性売買—大正期喜連川病院・米沢福田遊廓の史料から—」シンポジウム「幕末から近代における性の売買」(同上主催)
- 廣川 和花「伝統社会の生存システムと医療の〈近代化〉—栃木県塩谷郡の事例から—」近現代史研究会第12回大会, 2021年

## 【書籍】

- 国立歴史民俗博物館監修・「性差の日本史」展示プロジェクト編『新書版 性差の日本史』第6章, 集英社インターナショナル, 2021年, pp.131-170
- Yuriko Yokoyama, Chapter18 The Meiji Restoration as Social History: With a Focus on Edo and Tokyo, *Revisiting Japan's Restoration: New Perspectives to the Study of the Meiji Transformation*, pp.165-172, 2021, Routledge (New York)
- 横山百合子「他者として遊女の「日記」を読むということ:「日記」を書く遊女たち」国立歴史民俗博物館三上喜孝・内田順子編『REKIHAKU』特集「日記がひらく歴史のトビラ」文学通信, 2021年, pp.34-39
- 横山百合子著・張敏/丁諾舟訳『从江戸到東京: 小人物們明治維新』上海人民出版社, 2021年, pp.1-196
- 森田朋子「IV 開国 総論」松永昌三ほか編『領域の歴史と国際関係(下) 近現代』(郷土史大系) 朝倉書店, 2021年6月, pp.196-218
- 廣川和花「日本における感染症史研究の現状と展望」公益財団法人日韓文化交流基金第21回日韓歴史家会議報告書『伝染病と歴史』

## 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎横山百合子 本館・名誉教授  
森田 朋子 中部大学人文学部・教授  
廣川 和花 専修大学文学部・教授

(18) 基盤研究 (B)  
格・式研究を踏まえた日本古代社会の再構築  
2020～2022年度  
(研究代表者 小倉 慈司)

## 1. 目的

本研究は、最新の写本研究を踏まえて『類聚三代格』と『延喜式』という9～10世紀の基本史料テキストに再検討を加えることにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図ることを目標とする。

『類聚三代格』と『延喜式』は古代の法制である律令格式のうちの「格」と「式」にあたるが、これまで写本研究が充分になされなまま本文利用がなされてきた。近年進んだ両史料の写本研究を踏まえ、新たな本文校訂を進めつつ、それを踏まえて新たな古代社会像の再構築をめざす。9～10世紀は、以前より古代日本にとって大きな転換期であると考えられてきた。それは律令制の導入によって示された社会建設・制度設計が消化されつつ、実態に合わせて社会により適合的な形に修正され、独自の日本的な制度社会が形づくられる過程として理解されてきたが、近年では加えて民間の交易活動も注目されるようになり、東アジア、さらには東部ユーラシア世界のなかで日本列

島を捉えようという視点も高まっている。また地震や火山噴火等、自然災害への関心も高まり、世界的な環境・社会変動のなかで考えていこうとする見方もある。しかしこのような研究状況にもかかわらず、研究の基礎となるべき文献史料については十分な再検討がなされないままになっている。

そこで本研究では、最新の写本研究を踏まえて『延喜式』と『類聚三代格』という基本史料テキストを再検討することにより、古代社会を広い視野から捉え直し、その展開過程の解明を図る。

## 2. 今年度の研究計画

本研究では『類聚三代格』と『延喜式』という2つの法制史料を主たる研究対象とする。

『類聚三代格』については、校訂本出版に向けて、これまでに底本選択や校訂方針の検討を進めてきた。本年度は巻1～4について実際に素原稿を叩き台に検討を加え、入稿できるような形にまで整えていくことを目指す。

『延喜式』については、既に写本系統の検討を進めた巻9・10を初めとして、10巻分程度の校訂本文作成を目指す。またこれまでに進めてきた延喜式関係論文目録データベースのデータ追加を進める。さらに史料学をテーマとした講演会を開催する。

海外発信については、『延喜式』英訳に関する国際研究集会を開催する。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

COVID-19流行の影響は続いたが、『類聚三代格』に関してはようやく12月11日に巻1素原稿および巻4検討事項の検討会を開催することができた。これをもとに巻1については入稿原稿をほぼ完成させ、巻2～4については素原稿作成を進めた。『延喜式』についても、COVID-19の影響によって写本調査がなかなかできないでいたが、3月ようやく神宮文庫を調査することができ、今後、巻9・10の校訂本文作成を目指す。本年度完成目標を計画していたその他の巻についても2022年度に完成を目指す。英訳についてはオンラインを活用することによってワークショップ・英訳検討会を実施し、12月18～19日にオンラインではあるものの、予定通り国際研究集会「国境を越える『延喜式』」を開催することができた。また基幹研究プロジェクト歴博ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」と共催して史料学の講演会を7月3日、10月2日の2回、また古代土器シンポジウム「器名・器形・用途・貢納—正倉院文書・延喜式にみえる土器」を3月19日に開催した。以上の詳細については、基幹研究プロジェクト歴博ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の活動報告を参照されたい。

以上の他、延喜式関係論文目録データベースの充実に力を注ぎ、12月に36,090件の新規データを追加して、総件数77,910件の論文データを公開した（主に著者名の1字目の読みが「さ」行まで）。

### 【研究成果】

上述以外の研究成果は以下の通りである。

### 【著書】

「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」歴博ユニット）編、「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」講演会記録集1・2、「格・式研究を踏まえた日本古代社会像の再構築」・「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」（人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による「総合書物学」の構築」歴博ユニット）、2022年3月、129頁

井上正望、日本古代天皇の変質—中世的天皇の形成過程—、塙書房、2022年3月、ISBN978-4-8273-1330-7、408頁

小倉慈司、古代律令国家と神祇行政、同成社、2021年6月、ISBN978-4-886-21866-7、340p.

河合佐知子、Uncertain Powers : Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan. Harvard University Asia Center, 2021年11月、ISBN0674260163、330頁

仁藤敦史、藤原仲麻呂、中央公論新社、2021年6月、ISBN9784121026484、258頁

三舟隆之・馬場基編（小倉慈司ほか執筆）、古代の食を再現する—みえてきた食と生活習慣病、吉川弘文館、2021年6月、ISBN978-4-642-04661-9、316頁

佐々木慶一・川尻秋生・黒濟和彦編、馬と古代社会、八木書店、2021年5月、ISBN9784840622479、554頁

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、シリーズ地域の古代日本 東アジアと日本、KADOKAWA、2022年2月、ISBN9784047036963、272頁

吉村武彦・川尻秋生・松木武彦編、シリーズ地域の古代日本 筑紫と南島、KADOKAWA、2022年2月、ISBN9784047036994、272頁

## 【論文】

- 井上正望, 古代・中世移行期における天皇の変質—「隠蔽」される天皇, 史学雑誌130-4, pp.38-63, 史学会, 2021年4月, 査読有り, ISSN0018-2478
- 小倉慈司 (程茜訳), 古代天皇と神祇祭祀, 日本学研究32, pp.3-27, 社会科学文献出版社, 2022年1月, 査読有り
- 小風尚樹・中村覚・永崎研宜・渡辺美紗子・戸村美月・小風綾乃・清武雄二・後藤真・小倉慈司, 相互運用性を高めた日本歴史資料データ実装:『延喜式』TEIとIIIFを事例として, じんもんこん2021論文集, pp.294-301, 情報処理学会, 2021年12月, 査読有り
- 川尻秋生, 「水落地蔵」の納入品からみた鎌倉初期の東国と東北, 禁裏・公家文庫研究8, 思文閣出版, 2022年3月, pp.99-121, ISBN9784784219766
- 中村光一, 上野三碑は語る, 日本史学集録42, pp.1-12, 筑波大学日本史談話会, 2021年7月, ISSN0913-7203
- 仁藤敦史, 天平期の疫病と風損—国家による対策と地域—, 静岡県地域史研究11, pp.61-84, 静岡県地域史研究会, 2021年9月
- 三上喜孝, 古代日本における人面墨書土器と祭祀, 東西人文16, pp.301-305, 慶北大学校人文学術院, 2021年8月, 査読有り
- 三上喜孝, 日本出土の古代木簡—戸籍と木簡—, 木簡と文字26, pp.327-334, 韓国木簡学会, 2021年6月, 査読有り
- 三上喜孝, 出土文字資料から見た払田柵の機能, 国立歴史民俗博物館研究報告232, pp.277-286, 国立歴史民俗博物館, 2022年3月, 査読有り, ISSN0286-7400
- 山口えり, 『日本三代実録』にみえる告文について, 神道宗教264・265, pp.49-75, 神道宗教学会, 2022年1月, ISSN0387-3331
- 小倉慈司, 讃岐国司解端書 (いわゆる「藤原有年申文」) の再検討, 禁裏・公家文庫研究8, 思文閣出版, 2022年3月, pp.3-19, ISBN978-4-7842-2035-9
- 三上喜孝, 漢字文化の東アジア的展開と列島世界, 地域の古代日本—東アジアと日本—, KADOKAWA, 2022年2月, pp.169-205, ISBN9784047036963

## 【書評・その他】

- 小倉慈司, かな日記と『土佐日記』, REKIHAKU3, 2021年6月, 国立歴史民俗博物館, pp.31-33
- 小倉慈司, 西本昌弘編著『日本古代の儀礼と神祇・仏教』, 歴史評論859, 2021年11月, 歴史科学協議会, p.94
- 小倉慈司, 口絵 葦浦継手手実 (解説), 正倉院文書研究17, 2021年11月, 吉川弘文館, pp.101-102
- 河合佐知子, 「女院」から見直す日本史 Rethinking Japanese History through Examining Premier Royal Ladies (Nyoin), REKIHAKU4, 2021年10月, 国立歴史民俗博物館, pp.56-57
- 中村光一, 上野国府と平将門, ぐんま地域文化56, 2021年4月, ぐんま地域文化振興会, pp.6-7
- 三上喜孝, 東アジアの木簡, 古代日本対外交流史事典, 八木書店, 2021年11月, pp.105-109, ISBN978-4-8406-2249-3
- 遠藤慶太, 「海の民」の日本神話—三浦佑之著— 征服された側の多様な交流, 日本経済新聞, 2021年10月30日, 日本経済新聞社, p.34

## 【講演・口頭報告】

- 遠藤慶太, 日本書紀の成り立ち—武烈天皇から継体天皇へ—, 市民歴史大学, 柏原市歴史資料館, 2022年2月19日, 国内, 招待有り, 市民歴史大学 (大阪府柏原市)
- 小倉慈司, 天皇制の歴史, 特別講義, オンライン, 2021年4月10日, 国際, 招待有りvミズル科学技術大学言語翻訳学部日本語学科
- 小倉慈司, 伊勢物語の世界—その歴史的背景を探る—, 伊勢物語の世界—その歴史的背景を探る—, 朝日カルチャーセンター千葉, 2021年7月17日, 国内, 招待有り, 朝日カルチャーセンター千葉
- 小倉慈司, 古代日本における「文書」の誕生, 中世文書の様式と東アジアにおける国際比較, オンライン, 2021年11月20日, 国内, 国立歴史民俗博物館
- 小倉慈司, 写本の再調査による大日本古記録本『小右記』の補訂, 『小右記』シンポジウム, オンライン, 2021年12月18日, 国内, 招待有り, 新古代史の会
- 小倉慈司, 平城京大寺院における僧侶の生活—西大寺食堂院と僧房をめぐって—, 西大寺食堂院跡の古代食再現! シンポジウム, オンライン, 2022年3月3日, 国内, 科研費「東ユーラシア東辺における古代食の多角的視点による解明とその栄養価からみた疾病」
- 河合佐知子, Book Talk: Uncertain Powers, Winter 2022 Lecture Series at the Center for Japanese Studies, the

University of Michigan, Center for Japanese Studies, the University of Michigan, オンライン, 2022年3月18日, 国際, 招待有り, Center for Japanese Studies, the University of Michigan

河合佐知子, Persistence and Resilience: The Nyoin Institution and Female Contributions to the Continuation of Monarchical Power in Early Medieval Japan, Association for Asian Studies (AAS) Annual Conference, Hawaii, 2022年3月27日, 国内, AAS

堀裕, 日本の大極殿と宮中における仏事の展開, 第2回宮と都の東アジア比較宗教史シンポジウム—日本・宋・高麗・契丹—, オンライン, 2021年11月7日, 国内, 招待有り, 東アジアの宮都と宗教行事研究会

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎小倉 慈司 本館研究部・教授 宗教史分野 (神祇史), 研究の統括

##### 【研究分担者】

遠藤 慶太	皇學館大学文学部・教授	文化史分野
河合佐知子	本館研究部・特任助教	海外発信・海外研究者育成
川尻 秋生	早稲田大学文学学術院・教授	社会文化史分野
中村 光一	上武大学ビジネス情報学部・教授	政治史・技術史分野
仁藤 敦史	本館研究部・教授	法制史分野
堀 裕	東北大学文学部・教授	宗教史分野 (仏教史)
三上 喜孝	本館研究部・教授	流通経済史分野
山口 えり	広島市立大学国際学部・准教授	宗教史・文化史分野

##### 【支援研究員】

井上 正望

### (19) 基盤研究 (C)

日本仏教と東南アジア仏教との比較研究—政治と権力の視点を中心として—

2019～2022年度

(研究代表者 松尾 恒一)

#### 1. 目的

本課題「日本仏教と東南アジア仏教との比較研究—政治と権力の視点を中心として」は、日本史学・日本民俗学の研究者と、主として東南アジアを調査地域とする文化人類学研究者による共同研究である。大乘仏教圏の日本仏教と上座部仏教圏との比較を、国家統治のあり方、各地域で仏教と関係を結んだ民俗信仰、特に民俗神と仏教との関係等に注目して研究し、数世紀～1000年以上の仏教の歴史を有するアジア諸地域の、仏教が果たした社会的な役割と、現代社会への継承のあり方を解明することを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

第3年度となる本年度は、2020年年初からのコロナウィルスの全国、東南アジア地域を含む世界的な拡大により、国内外ともに移動について、国や都道府県から感染対策のため控えるように呼びかけられた。また、分担者の所属の大学や機関では、やはり感染対策として、対面での共同研究会の開催が基本的には認められなかった。こうした状況に対応するため、新型コロナウイルスの国内外の状況を注意深く見つつ、密に連絡をとり、地域調査と共同研究会の開催について検討することとした。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

本共同研究は、東南アジアを中心とする上座部仏教圏と大乘仏教圏である日本との比較による、国家と宗教との関係性を文化人類学、民俗学、歴史学の専門研究者との協業により考究することを目的とする。

今年度(2021)は、国立歴史民俗博物館の「東アジア・東南アジアの宗教・信仰の交流、歴史と伝承」プロジェクト研究において、内蒙古出身の蒙古貞夫氏(学芸大学研究員)の協力を得て、内蒙古東部地域における農耕・牧畜のための祈願についての伝承調査を推進した。内蒙古は、大乘仏教圏のチベット仏教のラマ僧による布教が行われてきた地域で、戒律が重視されるとともに六道輪廻の信仰が濃厚である。しかしながら、寒冷地帯における遊牧・農耕の生活は、伝統的に稲作のウェイトの大きい日本や東南アジアと異なるものの、民間レベルでの仏教と民俗神

との混淆といった点で日本との共通性も認められる。遊牧地域において、動物の屠殺の際の動物霊の転生を願う祈りに六道輪廻の思想の影響が認められることが明らかになった。次年度はさらに日本及び東南アジア仏教圏における自然環境と生業、社会における信仰との関係性について比較、考究を進める。

戒律の中でも、動物・魚類等の殺生を禁ずる殺生戒の実践について、日本社会と東南アジア社会との差異に注目しての討議を推進した。古代の日本では、国土を統治する天皇が菩薩の資格を有する転輪聖王として殺傷を禁ずる発令をしたが、その発令の及ぶ地域が統治を内外に示す意義を有した。一方、香港の道教による水陸儀礼や東南アジアの寺院での死者霊を済度する普度儀礼において放生が行われる例が少なからず見られる。ベトナム・タイ・マレーシア等ではまた寺院周辺において鳥籠より鳥を放して金員を得る民間宗教者が存在する。仏教の民間への普及における、寺院・僧侶以外の私的な宗教者の活動について、日本仏教の場合との比較検討の必要性が今後の課題となった。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

上島 享 京都大学文学研究科・教授

片岡 樹 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

中西 裕二 日本女子大学人間社会学部・教授

◎松尾 恒一 本館研究部・教授

### (20) 基盤研究（C） 幕府瓦解後の旗本土着をめぐる研究 2019～2021年度 (研究代表者 樋口 雄彦)

#### 1. 目的

江戸幕府に仕えた幕臣のうち、知行地を有した旗本を事例に、維新前後の政治的・社会的動向をふまえ、武士身分の近代社会への順応のし方を明らかにする。独立した領主であることと徳川家の直臣であることが、幕府瓦解時にいかに再認識され、どちらが優先されたのかという問いが基本的なテーマとなる。具体的には、旗本領の名主をつとめ、家臣にも取り立てられた豪農の家に伝来した資料（静岡県伊豆市・飯田家文書）を素材に、伊豆国田方郡牧之郷村（現伊豆市）などに知行地を有した旗本松下家を主要な分析対象とする。幕府が倒れた後、一時的に采地への移住・土着を経験した高禄の旗本の多くが、まもなく旧幕府・徳川家の臣下を離脱し新政府直属の朝臣となることを志向した背景や、その選択を支えた家臣・領民との近世後期からの関係性、明治2年（1869）に領主の地位を喪失した後も大正・昭和期まで続いた旧領との交流のあり方などに焦点をあてる。

#### 2. 今年度の研究計画

本研究が調査・研究の主要な対象資料として位置付けている牧之郷飯田家文書（静岡県伊豆市）について、昨年度と同様、未整理状態になっている分の資料整理作業（整理保存用封筒への記述・収納および文書保存箱への収納）を行い、将来に向けて目録作成の準備を進めるとともに、研究テーマ（幕府瓦解後の旗本土着の動向）に必要な資料の確認と撮影を実施する。また、撮影した資料の解説・入力を行い、基本的な事実を把握するとともに、テーマに関する考察を加える。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

研究当初からの計画として、牧之郷飯田家を訪問しての調査を月1回以上のペースで予定していたが、昨年度と同様、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため、11月に行った1回の調査を除き、予定通り実施できなかった。そのため、主に一昨年度に撮影していた資料の解説や考察を進めることに徹し、資料紹介として「旗本土着と戊辰戦争―伊豆の松下加兵衛とその周辺―」の原稿を完成させ、次年度刊行予定の『国立歴史民俗博物館研究報告』通常号に投稿することとした。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎樋口 雄彦 本館研究部・教授

(21) 基盤研究 (C)  
 帝国日本における学校儀礼教育の歴史：声・音の検討を中心に  
 2019～2021年度  
 (研究代表者 樋浦 郷子)

1. 目的

本研究は、植民地期の台湾や朝鮮において実施された学校儀式や学校で要請された拝礼や低頭などの儀礼の歴史に、「声」「音」という問題意識から迫るものである。「声」とは、儀式時の校歌斉唱や「沈黙」、「皇国臣民の誓詞」斉誦や「御製」の誦唱、スポーツ大会の宣誓等を想定する。「音」とは、ラジオ体操の音や号令、笛やラッパ、時鐘を想定する。実際には自分の統制のもとにあるはずの身体および精神に、他者の介入を容易にさせる媒介物として「声」「音」は重要な役割を担っている。とくに植民地の学校教育のなかにあらわれた具体的なそれらの様相をつぶさに観察することを通じ、帝国日本において就学することがどのような意味を付与するものであったのか、「帝国日本の国民」はどのように創出されようとしたのかという大きな問題に、「声」「音」に着目しながら接近を試みたい。

2. 今年度の研究計画

2021年度には、①東アジア史の視座で学校教育における音読（素読）、筆写、暗唱など、多様な身体の動きを歴史的に検討すること、②当初の予定どおり「誓う」「誓わせる」という方法を用いた教育について歴史的な検討をすすめることを目標とした。これらは、21年度または22年度に学術団体機関誌への投稿を予定する。

3. 今年度の研究経過及び成果

2021年度においては、①植民地・日本内地を問わず学校日誌や沿革誌など、学校保存書類のなかにあらわれる学校儀式など行事の様態に迫り、②「誓う」「誓わせる」という方法を用いた教育について歴史的な検討をすすめ、次のように成果を公表した。

【発表】

「帝国日本の身体髪膚」（国際シンポ）「近代東亜体育世界與身体」（台湾成功大学、オンライン開催）、2021年5月14日

「誓わせる教育」の展開について一通過点・転換点としての「皇国臣民ノ誓詞」—教育史フォーラム・京都（オンライン開催）、2022年3月7日

【分担執筆】

「帝国日本の清潔と清潔感」『〈洗う〉文化史「きれい」とは何か』（国立歴史民俗博物館・花王株式会社編）、2022年2月、pp.62-78

【執筆】

「(研究ノート) 韓国併合直後の公立普通学校—「草溪公立普通学校沿革誌」を手がかりとして—」『教育史フォーラム』16、教育史フォーラム・京都、2021年6月、pp.85-98

4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎樋浦 郷子 本館研究部・准教授

(22) 基盤研究 (C)  
 古代荘園と在地社会についての高度情報化研究  
 2020～2022年度  
 (研究代表者 仁藤 敦史)

1. 目的

本研究は、古代荘園と在地社会の実態分析から「日本型律令制」の理念と実態を、従来の肉眼観察だけによらないGISなどの新たな資料分析手法を積極的に導入することにより明らかにする。具体的には、初期荘園が「公地公民」を理念とする律令国家の変容から生まれたという通説の修正と、東大寺領北陸型荘園に片寄った資料的限界の打破を目指す。荘園立券化以前の土地利用状況を出土文字史料などにより明らかにする点も新しい試みである。

本研究の射程は、在地社会から古代荘園を見直し、律令制以前からの屯倉に代表される大土地所有と古代荘園と

の連続性を明らかにし、延いては「公地公民」を理念とする「日本型律令国家像」の相対化を試みる。条里坪付けごとの情報やその古代景観を明らかにでき、その景観が開発により急速に失われつつある「額田寺伽藍並条里図」や栄山寺文書を中心に分析する。

## 2. 今年度の研究計画

第二年度は、初年度に引き続きA研究史整理と論点の確認をおこない、B額田寺伽藍並条里図の非破壊分析（印影と布端を中心に）と麻布の科学的分析、C条里坪付け情報の高度情報化作業を進展させることを計画している。加えて、D基本図書の資料収集、E荘園史料の整理検討も並行しておこなう。フィールドワークとしてはI栄山寺周辺予備調査（奈良県五條市）とII額安寺周辺調査（奈良県大和郡山市）、さらに、外部の研究協力者およびゲストスピーカーを集めて歴博での研究会開催を予定した。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は、新型コロナ蔓延による移動の制約が緩和された時期に、10月24～26日と12月25～27日の二回のフィールドワークを実施することができた。それ以外についても、概ね当初の計画どおりに計画を進めることができた。

まずAの研究史整理は、額安寺領および栄山寺関係の先行研究論文のリスト化を前提に、主要なものを集めた。さらに、内容の検討もおこない、重要な論点の整理をおこなった。その成果の一部は、歴博共同研究の研究会において発表をおこなった。

Bの額田寺伽藍並条里図の非破壊分析と麻布の科学的分析については、8月16日・17日および2月22日・3月1日に本館島津美子氏らの協力を得て、電子顕微鏡による非破壊調査を実施した。西山虎之助氏による模写ですでに確認されていた56個所以外に、さらに多くの影印の痕跡が残されていることを確認し、具体的な押印個所の正確な位置を計測した。特に左端については、明確に端を超えて国印が捺されていることも確認され、布の切断面の検討を加味するならば、本来はさらに大きな図面、あるいは文書的な形式であった可能性も指摘できた。Cの条里坪付け情報については、坪単位の開発情報の集積を完了し、条里ごとの経年的変化の検討をおこなった。そのうえで、寺領認定の周辺への拡大傾向を把握することができ、とりわけ藤原武智麻呂の墓域内（東西十五町・南北十五町）が、その後の栄山寺領において重要な経営拠点となっており、国司に対する認定の重要な根拠として用いられた可能性が指摘できた。Dの基本図書の収集については、今年も栄山寺関係の図書を古書で購入した。

歴博共同研究と合同のフィールドワークおよびZOOM会議において、古代・中世研究者から多くの助言を受けた。来年度は、吉野川南岸の河南条里についても検討を深化させたい。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎仁藤 敦史 本館研究部・教授

### 【研究協力者】

後藤 真	本館研究部・准教授	荘園情報分析
三上 喜孝	本館研究部・教授	出土文字分析（古代史）
山口 英男	東京大学史料編纂所・教授	荘園絵図分析・文書分析（古代史）
鷲森 浩幸	帝塚山大学文学部・教授	荘園調査・文書分析（古代史）
鈴木 景二	富山大学人文学部・教授	出土文字分析・荘園調査（古代史）
島津 美子	本館研究部・准教授	非破壊分析（保存科学）I

## (23) 基盤研究（C）

日本開国史の再構築—「開国のかたち」をめぐる国際的相克の解明  
2020～2022年度  
(研究代表者 福岡 万里子)

### 1. 目的

幕末に徳川政権が結んだ西洋諸国との修好通商条約は、その後世紀転換期に明治政府が条約改正を実現するまで四半世紀以上の間、近代日本の「開国のかたち」を決定づけた。本研究は、この「開国のかたち」が形作られた過程を、様々な「かたち」の候補が構想された中で、西洋列強間の国際的相克と幕府内外の開国方針をめぐるせめぎ合いを経て特定の候補が勝ち残り、施行され、かつ再調整がなされていった過程と捉え、その実態を多言語史料から見直すことで、日本開国史の国際関係史としての再構築を図る。方法的には、当該過程を駆動した西洋側キーパー

ソンとして、米国初代駐日総領事ハリス、オランダ対日外交顧問シーボルト、同国駐日代表クルチウス等に着目し、彼らの直接・間接の競合的な対日外交を通じて1858/59年の通商開国のあり方が決定され、通商開国後はさらにイギリスやプロイセンなど諸列強が新たに参入する中で再調整がなされていく国際関係の動態を、マルチ・アーカイヴァル・アプローチにより解明していく。

## 2. 今年度の研究計画

- ・昨年度までに行ったハリスの発信書翰群（ニューヨーク市立大学所蔵ハリス文書中のレターブック5冊に収録）の翻刻調査成果を下に、今年度以降、論文をテーマ毎に執筆していく。
- ・まず昨年度後半から執筆を開始した、ハリスのシャム（タイ）における1856年の条約交渉について、前年のパウリングによる英シャム条約交渉と比較しながらその特徴を考察する論文を完成させる。
- ・『年報政治学』特集「幕末・明治期の国際関係再考」に投稿するための論文を準備する。日本の通商開国後における「開国のかたち」の再調整（開港開市延期問題）及び外国人襲撃殺害事件をめぐる西洋駐日外交団の認識と対日外交を扱う予定。

## 3. 今年度の研究経過及び成果

今年度は主に、研究課題に関する論文1本をほぼ完成させるとともに (①)、次にまとめるべき論文1本について、史料調査を行った上で、研究会において論文構想報告を行った (②)。

①の論文は、昨年度、『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号「近世近代転換期東アジアの外交と通商—海域世界の秩序変動（仮）」の一論文として投稿した「米使ハリスの1856年対シャム条約交渉—パウリングの経験との比較から」である。これについて、2名の研究者の査読意見を受け、特に19世紀前半における英国や米国のアジア貿易の環境変化について、追加的な文献調査の上で大幅な加筆を行い、表題を「パウリングとの比較からみるハリスの対シャム条約交渉—19世紀前半アジアの貿易構造変化と外交」と変更した上で、再提出した。筆者が編集代表を務める上記論集の一論文として、遠からず刊行される予定である。同論文は、1855・56年のパウリングとハリスの対シャム条約交渉を英米の一次史料を用いて綿密に再構成し両者を比較したもので、英使・米使へのシャム王室の差別的待遇の実態を明らかにし、その経験がハリスの対日外交に及ぼした影響を展望した。新たな対シャム条約を必要とした英米の事情の徹底的考察と併せ、日本開国史の前提条件をアジア大の視点から理解するための知見を提供する論考になると思われる。

②の論文は、「誰が主権を有するのか？—幕末駐日外交官の日本認識と外交1858-62（仮）」というもので、昨年度までのハリスの発信書翰群の調査成果と、今年度に調査を進めた英公使オールコックや蘭代表クルチウスの対日外交関係史料からの知見をもとに、準備を進めている。次年度、所属する学会の特集論集の一論文として投稿予定である。同論考は、幕府の国内政治上の地位や朝廷・諸藩との関係についての西洋駐日外交官の認識のギャップが彼らの対日外交に与えていた影響を読み解くものである。

## 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎福岡万里子 本館研究部・准教授

### (24) 若手研究

#### 幕末維新期の角館地域を中核とした知的関係と政治意識の形成

2018～2021年度

(研究代表者 天野 真志)

### 1. 目的

本研究では、近世以来多様な学問体系を受容し、複合的な文化的空間を形成した出羽国秋田藩角館地域を対象に、①平田国学流入以前の文化的特質の形成、②平田国学と角館地域との対峙、③平田国学との関係を通じた政治意識の形成を検討する。これまで国学思想の政治的役割についてはその具体像を提示するに至っていないが、本研究では秋田藩角館地域を対象としたモデルケースとして、平田国学との関係を通じた政治意識の具体相を提示し、近代国家形成過程における文化・思想の政治的意義を再検討することを目指す。

### 2. 今年度の研究計画

新型コロナウイルスの影響で現地調査を含む史料調査の計画が困難であるため、史料所蔵宅との情報交換を通し

て史料情報や状態の確認を進めていく。また、前年度までに調査・撮影した史料情報の整理を進めるとともに、史料の翻刻・検討を進め、史料紹介や論文を中心とした成果発信を進める。

### 3. 今年度の研究経過及び成果

これまでの調査・研究活動をまとめ、幕末政治過程における学問・思想の役割について秋田藩内の交流関係を通して分析し、その成果として『幕末の学問・思想と政治運動』を吉川弘文館より刊行した。本書では、研究課題で目的とした角館地域を中核とした知識人の交流関係の解明を石黒家文書等から考察し、そのなかで石黒家が儒学を中心とした学問的ネットワークに関与するとともに平田延胤を始めとした国学者と情報交流を契機に交流を始め、やがて対外認識や政治構想を議論する関係へと発展することを明らかにすることができた。これらの分析を通して、幕末期における政治運動において、学問交流を基軸としたネットワークが存在し、学派を超えた横断的な情報空間を形成していたことが明らかとなった。

また、石黒家文書調査の成果の一つとして、幕末期の石黒家当主である石黒織紀が編纂した風説留を翻刻し、史料集『石黒織紀 膺懲稗史』を製作した。角館地域を中核とした情報交流を象徴する風説留である「膺懲稗史」は、ペリー来航期から明治2年に至る全国の政治情報や秋田藩内の政治議論を膨大に収録しており、当該期の石黒家や角館地域をとりまく政治・思想状況を理解する上で重要な史料である。

最終年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響で現地調査を実施することができなかったが、その一方で所蔵者および角館地域における関係者と協力して情報精査を進め、これまで蓄積した史料情報を整理・翻刻することによる成果発信を展開することができた。その結果として史料集を作成して秋田県内の関係者や資料保存機関等に配布し、本研究成果の一部を関連地域に還元するための基盤整備に着することができた。

### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎天野 真志 本館研究部・特任准教授

## (25) 若手研究

### データ駆動型歴史研究のための共用テキストレポジトリ構築

2020～2022年度

(研究代表者 橋本 雄太)

#### 1. 目的

本研究の目的は、日本語歴史資料テキストの共用レポジトリ（歴史資料版「青空文庫」）の構築を通じて、歴史資料を対象としたデータ駆動型研究の基盤を確立することである。テキストマイニングやデータ可視化など、機械処理を駆使した歴史研究の遂行には機械可読形式で提供される大量のテキストデータの存在が不可欠である。しかしわが国は歴史資料のデジタルテキスト化について諸外国に大きな遅れを取っている。本研究では、まず①日本語文献資料に特化した軽量マークアップ言語の開発を通じてテキストの構造化記述を支援し、②また人文学資料の国際標準機械可読フォーマットであるTEIとの互換性を確立することで、その学術資源としての利用可能性を担保する。③さらに歴史資料翻刻テキストのユーザー参加型レポジトリを開設し、第一段階としてクラウドソーシングによって得られた650万文字の翻刻テキストを公開する。これによって国内外の研究者が日本語の歴史文献を対象としたデータ駆動型研究に取り組むための環境を整備する。

#### 2. 今年度の研究計画

2年目にあたる本年度は、①資料テキストのスタンドオフマークアップシステムの試験構築と、②気象災害資料集の全文テキスト化にあたる

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

①について。共用テキストレポジトリを研究コミュニティに利用してもらう上では、テキストの保持だけでなく構造化をも行えるプラットフォームであることが望ましい。本研究では、レポジトリに格納する資料テキストを構造化する手段として、XML/TEIや筆者が構築したKojiといったマークアップ言語の利用を当初検討していたが、テキスト本体にマークアップを埋め込むこれらの手法よりも、マークアップのオーバーラップを許容し、テキストとマークアップを分離して保持する、スタンドオフマークアップシステムの方が様々な場面で柔軟に利用できることが分かってきた。これを踏まえて、災害資料をターゲットとして資料テキストのスタンドオフマークアップを可

能にする「みんなでマークアップ」<https://markup.honkoku.org/> というシステムを試験的に構築し、試験的に資料数点をマークアップした。このマークアップシステムは、テキストレポジトリに取り込まれる予定である。

②について。テキストレポジトリにて最初に公開する資料の候補として、有史以来の日本国内の気象災害史料を収集した『日本気象史料』の全文テキスト化をおこなった。現在、90%ほどのテキスト化が完了している。

#### 4. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎橋本 雄太 本館研究部・テニュアトラック助教

### (26) 特別研究員奨励費

#### 近代日本の先祖祭祀と文化的アイデンティティ—東アジアとの差異化の観点から—

2019～2021年度

(研究代表者 問芝 志保)

#### 1. 目的

本研究は、先祖祭祀研究と文化ナショナリズム研究とを架橋し、「日本は近代的な〈他者との出会い〉のなかで、先祖祭祀を核とする宗教文化的ナショナルアイデンティティをどのように形成し、現実へと反映させてきたのか」を明らかにすることを目的としている。研究代表者はこれまで、19世紀末以来の初期グローバリゼーションのなか、西洋化・文明化の受容やそれへの対抗で揺れ動く日本が、〈あるべき日本の先祖祭祀と墓制〉を創造し、「先祖を祀る民族」というアイデンティティを獲得したことに注目し、その具体相を明らかにしてきた。本研究はその成果を引き継ぎつつ、近代日本がアジアへ向けた視線や、それがもたらした実質的な影響をふまえながら、アジアという〈他者との差異化〉の観点からもたらされた、先祖祭祀と墓制の再編の問題を解明することを目指すものである。この目的のため、①明治初期の神葬祭政策下で形成された墓地観・墓観、②明治中期～大正初期頃における啓蒙主義的・開明派知識人におけるアジア葬送文化に対する評価（単にアジアの祖先崇拜や葬送墓制習俗を軽視・蔑視するのではなく、称賛・尊敬していた可能性も含めて検討）、③特に台湾を事例とし、台湾の墓制に対する日本側の評価と介入、という3つの段階的テーマを設けて分析を進める。

#### 2. 今年度の研究計画

研究初年度は上記テーマ①のなかでも、近世末期～明治20年頃までの間における神葬祭墓地をめぐる思想や言説について、主に国内の図書館や資料館を活用して資料収集を行い、その内容の分析を行う。2～3年目は、テーマ①②について引き続き補足的調査・分析を行うとともに、③について、国立台湾図書館の台湾研究センターや国立台湾大学図書館、台北市立図書館にて、台湾総督府関係資料を中心に日本統治期の墓地に関する制度史、法制史的調査を行う。また、台湾の古い墓地を実地調査し、日本統治期に「旧慣」とみなされた台湾在来の葬送墓制がどのようなものであるかを確認するための、予備調査を行う予定であった。

#### 3. 今年度の研究経過及び成果

研究期間3年のうち、初年度の2019年度は、「明治初期の神葬祭政策下で形成された墓地観・墓観」を明らかにすることを目的として、近世末期～明治20年頃までの間における神葬祭墓地をめぐる思想や言説について、主に国内の図書館や資料館を活用して資料収集を行い、その内容の分析を行った。また、現存する神葬祭墓地での実地調査も行った。2年目の2020年度は、「明治中期～大正初期頃における啓蒙主義的・開明派知識人におけるアジア葬送文化に対する評価」をテーマとし、国内における資料収集（『臺灣文化志』（昭和3）、『朝鮮彙報』（大正8）、『臺灣慣習記事』（明治40）など）を行い、内容を検討した。

最終年度となる2021年度は、当初の計画では台湾現地での資料収集・調査を行う予定であった。しかし、新型コロナウイルス流行のため台湾への出張がかなわなかったため、本年度は海外研究を断念せざるをえなかった。そこで、研究目的のなかでも、近代以降の日本国内で〈あるべき日本の先祖祭祀と墓制〉がいかに構築され現実化されていったのかを、具体的事例にそくして明らかにすることを目指すべく、方針を転換した。具体的には神戸市中央区にある神戸春日野墓地（寛永年間、徳川三代将軍家光の治世に創設されたとされる）を調査対象地とし、当該墓地に関わる文献資料を収集した。また、当墓地を運営する「春日野墓地協会」の役員・会員5名へのインタビュー調査を実施した。400年近い歴史のある当墓地が、いかなる意識や観念によって運営・利用されているかを検討した。

以上の成果についてはすでに中間報告としての内容で「現代都市社会と家墓の継承—神戸市の旧共有墓地を事例

に」と題し國學院大學日本文化研究所研究会（オンライン開催）において報告している。次年度初頭までに補足的調査・分析を行い、得られた成果を論文として学術誌に投稿する予定である。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎問芝 志保 本館研究部・外来研究員

#### (27) 基盤研究（C）

近代移行期，蝦夷地・北海道分領支配に関する歴史情報の復元的研究  
2019～2021年度  
（研究代表者 三野 行徳）

##### 1. 目的

##### 2. 今年度の研究計画

##### 3. 今年度の研究経過及び成果

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

### 【その他の外部資金】

#### (28) 受託研究

冠婚葬祭総合研究所「冠婚葬祭と情報化に関する研究」  
（研究代表者 山田 慎也）

##### 1. 目的

本研究は、冠婚葬祭の近代化について、情報化という観点からその実態を明らかにすることを目的としている。現在、新型コロナウイルス感染症の流行により、人々の直接的な接触が大幅に制限され、冠婚葬祭などの儀礼も従来のように実施できなくなっている。そこで注目されているのが、デジタル技術を利用したインターネット上のリモート結婚式や葬儀、法要であり、デジタル情報技術の利用が進められるようになった。ただし、冠婚葬祭を取り巻く状況はこれに留まらず、インターネットを利用した故人の紹介や追悼、契約や企画販売、また儀礼知識の情報流通などによって、それを提供する業者の側だけでなく、儀礼を行っている一般の人々にも大きな影響を受け、儀礼の伝承のあり方にも大きな変化が生じている。

しかし、情報化の観点から見ても、このようなデジタル技術の進展だけが、現代の儀礼に影響を及ぼしているわけではない。とくに近代以降の印刷技術の発展により、結婚式や葬儀のマニュアル化が進み、すでに儀礼の伝承と形態に影響を及ぼしてきた。しかも儀礼の種類によって、そのマニュアル化の過程や状況も異なっており、例えば結婚式はすでに近世から『罌粟袋』などの作法書がつくられ、近代になり神前結婚式、仏前結婚式など新たな結婚式の様式が誕生することで、作法書の種類は多岐にわたっている。一方で葬儀のマニュアル化は遅く、盛んに発行されるのは戦後のことである。ただし葬儀業者による祭壇のカタログ化はすでに戦前期から始まっているなど、産業化の展開によって情報化も進んでいった。

そこで本研究では、冠婚葬祭の多様な歴史的展開を情報化の観点から明らかにし、儀礼を行う人々にどのような影響を与えてきたのかを検討し、人々の人生観や生命観を照射するものである。

##### 2. 今年度の研究計画

まず本計画では、現代までの儀礼と情報化の過程との関係を明らかにするため、大きく印刷技術の展開とその影響を検討する「プリント班」と、デジタル技術の発達による情報化の過程とその影響を検討する「インターネット班」に分かれて、検討を行う。

##### 3. 今年度の研究経過および成果

葬送儀礼に関する作法書については、それぞれの時代によって特徴が見られ、幕末から明治初期には、神葬祭に

関する儀礼や葬具に特化した書籍や記録類が刊行されたが、当時、葬儀一般についての作法書などは基本的に刊行されておらず、これが登場するようになるのは明治中期以降であることがわかった。そのなかで比較的まとまっているものが、可南子の『祝祭送迎婚礼葬儀準備案内』で、1905（明治38）年であり、その内容は表題とは異なり、婚礼、葬儀、祝祭、送迎の順で解説が施されており、葬送儀礼に限定しているものではない。葬儀だけを取り上げたまとまった作法書については管見の限り、以下に述べる東京川流堂の小林又七発行の『葬儀要覧』が初見である。この『葬儀要覧』は、想定される読者は職業軍人であることがその内容や形式から把握できる。これを出版したのは川流堂であり、この出版社は軍関係の書籍を多数出版しているなかで、職業軍人の死に際しての手続きや知識についてそれをまとめて出版するには容易な会社であることが判明した。しかも葬儀施行届の例示では東京で葬儀を行う陸軍軍人であることから、この需要層をまさに示しているものと考えられる。

それぞれの地方出身の職業軍人が東京に長く在住し、葬儀をする上では、東京のやり方に従う必要がある。それぞれの地方では地方の慣習があるが、東京での作法にはあまり精通していない中で、このような作法書が求められたとおもわれる。しかも、軍人として出世し、時には叙爵し、また叙勲や叙位がなされるようになっていくことで、新中間層から上流へと社会的に上昇していく中では、その作法や手続きは初めてのことも多く、なおこのような作法書が必要とされたのではないだろうか。附録には、葬儀における祭料の受け取り方や勅使下問の対応方法などもあるのは、社会的に上昇した軍人の対応マニュアルであることを見て取ることができる。つまり職業軍人として近代に新たに成立した階層における葬儀のマニュアルが『葬儀要覧』であり、これによってその身分を維持するために必要な情報を供給するものなのであったことがわかった。

#### 4. 研究組織（◎は研究代表者）

◎山田 慎也	本館研究部・教授
橋本 雄太	本館研究部・准教授
土居 浩	ものづくり大学工芸技能学部・教授
田中 大介	自治医科大学医学部・教授
小谷みどり	身延山大学・客員教授
玉川 貴子	名古屋学院大学現代社会学部・准教授
間芝 志保	東北大学大学院文学研究科・准教授
瓜生 大輔	東京大学・先端科学技術研究センター・特任講師
宮澤 安紀	國學院大学・研究員
大場 あや	大正大学・非常勤講師

### (29) 受託研究 出土文字資料の集成的研究 (研究代表者 三上 喜孝)

#### 1. 目的

岩手県では「平泉文化研究機関整備推進事業」に基づき、第1期研究計画（H12～21年度）及び第2期研究計画（H22～R元年度）を通して継続的に研究を推進し、多くの成果を蓄積するとともに、毎年度、「平泉文化フォーラム」及び「平泉文化研究年報」により成果を公開してきた。2020年度開始の第3期からは、5カ年計画で5つのテーマを設定し、大学や国立の研究機関と連携をはかりながら研究を進めていくことになった。本研究課題は、その一つとして、12世紀平泉の政治、文化、宗教の諸相を明らかにするため、柳之御所遺跡を中心とした平泉の出土文字資料の整理・読解・内容検討を行い、同時に12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治・文化・宗教の諸相を復元することを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

- ・柳之御所遺跡の出土文字資料の整理、読解、内容の検討を行う。
- ・12世紀の国内出土事例を収集し、平泉の政治、文化、宗教の諸相を復元する。
- ・先端的科学機器を用いて文字資料の解読等を行う。
- ・平泉に設置される「新ガイド施設」を活用した調査、研究活動（平泉において10日から2週間程度の滞在研究を含む）を行う。
- ・研究成果を「平泉学研究会」と「平泉学フォーラム」及び「平泉学年報」で成果を発表し情報を発信する。

### 3. 今年度の研究経過

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、今年度の現地調査・資料調査は、12月13日（月）と、3月14日（月）の2回にとどまった。おもに、平泉の片仮名表記の木簡について集中的に調査をした。

### 4. 今年度の研究成果

今年度の研究成果を、2022年2月5日の「平泉学研究会」（於岩手大学、オンライン参加）において研究者向けに、2月6日の「平泉学フォーラム」（オンライン参加）において一般向けに口頭発表し、それを三上喜孝「平泉出土文字資料へのアプローチ（2）片仮名木簡」『平泉学研究年報』2、2022年3月としてまとめた。

### 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎三上 喜孝 本館研究部・教授

## (30) 受託研究 石川県珠洲市内での民俗調査 (研究代表者 川村 清志)

### 1. 目的

本研究では「奥能登国際芸術祭実行委員会（事務局：石川県珠洲市）」が実施する「大蔵ざらえプロジェクト」の推進のため、アートフロントギャラリーと共同作業を行い、地域社会に残存する文化資源の保存と活用についてのアクションリサーチをおこなう。「大蔵ざらえプロジェクト」は、石川県珠洲市の住民が保有する民具・祭具等を収集し、将来にわたって保存・活用するためのミュージアムを立ち上げるプロジェクトである。

### 2. 今年度の研究計画

今年度は、「大蔵ざらえプロジェクト」の実施に伴い、次の3点を予定した。

- 1) それらの資料の量的な把握と資料としてのアーカイブの作成
- 2) 記録撮影とアーカイブズの作成
- 3) 芸術祭のための活用するための民具と保存を優先する民具との仕分け

### 3. 今年度の研究経過

本プロジェクトでは、コロナ禍のためきわめて調査が制限された環境下にあった。しかし、術祭実行委員会、サポーターによる協力によって収集した資料のリスト化と画像記録を残すことができた。この過程では、随時、川村、川邊が現地で行われる作業、主に民具の写真撮影や資料整理とアーカイブズ化について助言を行った。それでも今年度の7月以後、現地において資料の撮影やアート作品への加工の現場に立ち合い、参与観察を行った。また、また、アーカイブズの資料の一環として、民具類の所有者からの聞き取りも多くなった。これらの調査をもとにスズ・シアター・ミュージアムにおいて展示する民具の選定とその解説パネルの制作を行なった。なお、これらの作業に先立つ形で、7月15日に行われた「スズ・シアター・ミュージアム設立シンポジウム」の二部において、司会と「大蔵ざらえ」についてのプレゼンテーションを行った。

また、芸術祭の期間中は、随時、ミュージアム内の点検を行いつつ、このミュージアムについてのカタログの制作に携わった。

### 4. 今年度の研究成果

天野真志・泉谷満寿裕・川邊咲子・北川フラム・南条嘉毅「スズ・シアター・ミュージアム設立シンポジウム」ラポルト・珠洲、2021年7月15日

共著：北川フラム・南条嘉毅・川村清志他『奥能登国際芸術祭2020+公式ガイドブック ムック』奥能登国際芸術祭実行委員会、「終わりの民具 始まりのアート」, pp.38-39, 2021年8月16日

共著：北川フラム・南条嘉毅・川村清志『スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」』, 104頁, 奥能登国際芸術祭実行委員会, 現代企画室, 2021年11月1日

### 5. 研究組織（◎は研究代表者）

- ◎川村 清志 本館研究部・准教授  
 天野 真志 本館研究部・特任准教授  
 川邊 咲子 本館研究部・プロジェクト研究員

### (31) 受託研究 冠婚葬祭と情報化に関する研究 (研究代表者 橋本 雄太)

#### 1. 目的

冠婚葬祭の多様な歴史的展開を情報化の観点から明らかにし、儀礼を行う人々にどのような影響を与えてきたのか検討し、人々の人生観や生命観を照射することを目的とする。

#### 2. 今年度の研究計画

デジタル技術を利用した、リモート結婚式やリモート葬儀や法要など、リモート儀礼の提供者、実施者の調査、またデジタル技術を利用した、情報発信等の実態の調査を行う。

#### 3. 今年度の研究経過

研究の足がかりとして、2022年4月に開催した自身の結婚式の準備にて利用される各種の情報システムについて分析・考察した。

#### 4. 今年度の研究成果

#### 5. 研究組織 (◎は研究代表者)

- ◎橋本 雄太 本館研究部・テニユアトラック助教  
 土居 浩 ものつくり大学・教授  
 田中 大介 自治医科大学・教授  
 小谷みどり シニアライフ研究所・代表  
 玉川 貴子 名古屋学院大学・准教授  
 瓜生 大輔 東京大学・助教  
 問芝 志保 日本学術振興会・特別研究員  
 宮澤 安紀 國學院大學・研究員  
 大場 あや 大正大学・非常勤講師  
 山田 慎也 国立歴史民俗博物館・教授

### (32) 産学連携共同研究 清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究 (花王株式会社) 2017～2021年度 (研究代表者 関沢 まゆみ)

#### 1. 目的

本研究の目的は、日本列島における「清潔」と「洗浄」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことである。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は、2000年前後までさかに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行い、「清潔」という文化全体を学際的にとらえていこうとするものである。

#### 2. 研究組織 (◎は研究代表者)

- |                    |                        |
|--------------------|------------------------|
| 西谷 大 本館・館長         | 久留島 浩 本館研究部・特任教授       |
| 大久保純一 本館研究部・副館長・教授 | 後藤 真 本館研究部・准教授         |
| 樋浦 郷子 本館研究部・准教授    | 橋本 雄太 本館研究部・テニユアトラック助教 |

桑原 祐子 奈良学園大学・教授	鏡味 治也 金沢大学・教授
金子 正徳 摂南大学・特任准教授	津田 浩司 東京大学・准教授
原 正一郎 京都大学・教授	岩淵 令治 学習院女子大学・教授
ウルスラ・フレイ 京都大学・研究員	
武馬 吉則 花王・エグゼクティブ・フェロー	中村 純二 花王・感覚科学研究所・室長
原水 聡史 花王・感覚科学研究所・グループリーダー	門地 里絵 花王・感覚科学研究所

◎関沢まゆみ 本館研究部・教授

### (33) 産学連携共同研究 日本産樹木年輪による炭素14年代較正曲線の整備 2021年度 (研究代表者 坂本 稔)

#### 1. 目的

地質環境の長期安定性に関する研究では、断層運動や火成活動などの自然現象を対象とした研究を実施している。その研究では、自然現象の発生時期等を明らかにするために、年代測定が行われるが、その中で炭素14年代法が最も良く利用されており、また数万年を対象とした年代測定において、最も高精度な年代法のひとつである。炭素14年代法では、得られた炭素14年代を我々が通常使う暦年代に変換するため、年輪年代法で年代の判明した樹木年輪などのデータに基づく「較正曲線」を用いる。較正曲線は、国際放射性炭素協会により推薦された世界共通のものであるため、その作成には世界中のデータが使用される。これまでわが国のデータで取り入れられたものは、福井県水月湖の堆積物のみであったが、本年新たに発表された較正曲線(IntCal20)には、初めて国産樹木年輪のデータが採用された。しかし、柱材など産地の不明な樹木のデータが多く、数も少なく、高精度の較正曲線を整備するにはデータが不足している。

本研究では、次期較正曲線作成時へのデータ提供を目指し、日本産樹木年輪のデータを取得し、炭素14年代較正曲線の整備を行う。測定試料として、本年7月岐阜県瑞浪市大湫町の神明神社にて倒れた大杉を用いる。本樹木は、神社のご神木であり、樹齢1000年以上といわれているが、倒木となったため、地元より研究への利用提供がなされることになったものである。このような数百年以上の樹齢を持ち、生育地の明らかな樹木の年輪年代と炭素14年代を得ることにより、次期較正曲線の重要な基礎データとなることが期待できる。

国立歴史民俗博物館(以下、歴博)は、日本産樹木年輪の炭素14の収集を行っており、2020年新たに発表された較正曲線(IntCal20)作成において日本産樹木年輪のデータを提供し、採用された実績を有す。日本原子力研究開発機構(以下、原子力機構)は、東濃地科学センターの加速器質量分析装置(以下、AMS)を用いて、炭素14による地質試料の年代測定を実施しており、上記日本産樹木年輪データの測定も一部担当した。このようにそれぞれの専門性、施設を生かし、双方が所有する専門的な知識及び技術を融合して本共同研究に取り組むことにより、次期年代較正曲線の整備に有用なデータの取得を行うことができる。また、本データを含む較正曲線の利用により、地質環境の長期安定性研究にて実施する年代推定の精度向上につながる。

#### 2. 研究組織 (◎は研究代表者)

◎坂本 稔 本館研究部・教授  
箱崎 真隆 本館研究部・プロジェクト研究員  
國分 陽子 原子力機構東濃地科学センター・地層科学研究部研究副主幹  
藤田奈津子 原子力機構東濃地科学センター・地層科学研究部研究員

### (34) 産学連携共同研究 展示を使った教材開発研究 2021～2024年度 (研究代表者 村木 二郎)

#### 1. 目的

展示資料は歴史学習の教材として極めて有用性が高い。これまでも国立歴史民俗博物館(以下、歴博)では、小中学生を中心対象として、展示室の実物資料や複製資料、復元模型を観察することで歴史を学ぶプログラムを多数

考案してきている。しかし、校外学習の時間が減少する中、学校遠足ではプログラムを十分消化できないことが多い。それ以上に、大多数の学校は歴博に向くこともできず、これらを楽しむことが不可能であり、その認知度も低い。COVID-19の蔓延によりこうした傾向はますます拡大する一方であり、展示室で来館者を待つだけでなく、積極的に学校現場に展示室を持ち込む方法を検討する必要に迫られている。

そこで、展示資料を使った歴史学習教材を開発することで、学校現場での利用を容易ならしめ、歴博展示の教育普及への一助とする。またそれによる波及効果として、歴博の社会的認知度を高めて存在意義を示し、さらには観客動員にもつなげる。…研究成果の社会還元、教育普及

これにあたっては、歴博館内の教員のみならず、学習教材を実際に使う学校現場の教諭と共同する必要がある。また学習教材の開発・販売に長けた外部機関と連携して共同開発プロジェクトとして実施し、歴博ならではの産学連携のあり方を実現する。…産学連携

## 2. 研究組織（◎は研究代表者）

田中 大喜 本館研究部・准教授

樋浦 郷子 本館研究部・准教授

◎村木 二郎 本館研究部・准教授

工藤雄一郎 学習院女子大学・准教授

曾雌 健二 山川出版社・編集長

水島 直樹 山川出版社編集部・部長代理

土居 由佳 山川出版社編集部

## (35) 研究助成 美術に関する調査研究の助成 研究題目：六朝装身具の復元的研究 (研究代表者 上野 祥史)

### 1. 目的

三国時代から南北朝時代にかけては、古典的中国世界が変容し、転換してゆく時期にあたる。思想、行動ともに、新たな時代に向けた胎動が始まる時期にあたる。四世紀以後、中国では思想・生業、行動形態の異なる集団が混在するなか、旧来の社会秩序は崩壊し、新たな社会秩序が構築されてゆく。装身具は、身分秩序、社会階層を可視化する装置であり、こうした価値や観念の変革を探るには好適な資料である。装身具は、身分秩序の変化や中国的装飾をまとう仏像の登場など中国社会の変容を検討できるだけでなく、中国と周辺地域の相互交渉を考える上でも有用な資料である。こうした変化の多くは、五世紀以後に明確な形としてあらわれてくる。しかし、その基礎をなす三・四世紀の装身具の状況については、出土資料が多いにもかかわらず、十分な検討が進んでおらず、その実態が整理されているわけではない。装身具を通じた比較研究を有用なものとするために、両晋期を中心とした装身具の実態解明に取り組む。

### 2. 今年度の研究計画

本研究では、三国時代から南北朝時代にかけての中国を対象とし、装身具の実態を明らかにすることを目的とする。出土資料をもとに、「身体装飾の形」を類型化し、性別あるいは社会階層など、被葬者の社会性と身体装飾との対応関係について整理する。主に、両晋期を中心に、身体装飾の形を整理することにしたい。壁画などの画像・図像、墓の副葬品、仏像などの立体造形など、さまざまな次元で装身具はみえているものの、名称同定等、考証学的な認識の域を出る議論は少なく、装身具の組合せ、その社会的価値（機能）へと議論が及ぶことは少ない。本研究では、出土資料を中心に文献資料を対照しつつ、「装身具」をめぐる人の動き、認識へと接近する。身体装飾の形に注目することにより、古典的中国世界から新たな秩序が創出される過程を多次元で描き出せることにつながる。

### 3. 今年度の研究経過

両晋期を中心に南北朝期にかけての装身具について、出土資料をもとに情報を集成し、装身具の形態及び組合せをもとに、「身体装飾の形」の類型化に取り組んだ。こうした現象整理をふまえ、装身具の保有者やその社会階層、視覚的効果などに注目することで、装身具の「扱い」を明らかにし、装身具をめぐる意識・行動の復元へと検討を

進めた。身体装飾の形を体系的に示すことにより、金璫（冠飾）や透彫帯金具（飾帯）など個別の検討視点や、文献資料を前提とした考証学的視点を相対化した、新たな装身具研究を展望した。

#### 4. 今年度の研究成果

両晋期の装身具体系、すなわち身体装飾の形の傾向を示すことにより、複数の方向へと議論を進めた。一つは、身分秩序を反映した「身体装飾の形」を実物に即して復元することである。輿服志などの文献資料が記録する服飾制度を相対化し、理念と実態を対比することにより、装身具にみえる現象を、両晋期の社会論や物資物文化論として評価した。装身具を、制度を検証・実態化・可視化する装置としての限定性から解放することに努めた。二つ目に、朝鮮半島（三国）や日本列島（倭）との比較をおこない、周辺諸地域が新たな社会秩序を構築するなかで、身分秩序と連動した中国の装身具を如何に利用したのかへと議論を進めた。文献史学研究で指摘される府官制（中国政治制度）を導入した社会秩序の構築と対比した検討が可能になることで、東アジア交流史への論点の提起にも繋がった。そして、人の身体の装飾とその象徴化の方向性を探ることで、仏像を受容する中国世界においての、身体装飾の比較の素地を整えた。成果は今後、鹿島美術財団の機関紙等にて公開する予定である。

#### 5. 研究組織（◎は研究代表者）

◎上野祥史